
かなたへ 第十七部 雪の季節

U B O B

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

かなたへ 第十七部 雪の季節

【Nコード】

N1989M

【作者名】

UBOB

【あらすじ】

いつしか季節は冬を迎えていた。そしてハルヒ達と迎える二回目のクリスマス、やはり俺は不幸な目に遭わなければならないのか？

第一章 トナカイの季節 12月18日(前書き)

「かなたへ 第十六部 お月見パラダイス」

<http://ncode.syosetu.com/n0514m/>

の続きです。

第一章 トナカイの季節 12月18日

ハルヒ、長門、かなたによる特訓で挑んだ期末試験もなんとか終了し二学期末の消化授業をダラダラと受け流しながら来るべき冬休みという僅かばかりの休息の日々を待ち焦がれつつ、それでもほんの少しばかりに華やいだ年末の商店街の雰囲気があるところはかたなく校内に漂い来る年の瀬を迎えようとしている12月18日の午後の事だ。巷に流れるインフルエンザ流行とかのニュースも、漸く終えた試験勉強の疲れも完全無視、年中無休の暴走機関車たるハルヒの牽引するSOS団の部室と変わり果てた文芸部部室で朝比奈さんの淹れてくださった有り難いフレーバーティーの湯気と香りに鼻腔と氣道を癒さんとティーカップの上に我が顔をのばして深く息を吸い込もうとした刹那、伝家の宝刀を抜いた武将が雷鳴の如く張り上げた声が俺の耳元で轟いた。いや、何が伝家の宝刀と言われれば困るのだが、それぐらい勢いのある声だったと言う事だ。

「いよいよ、来週よね」

先ほど教室で死にそうな顔をしていた谷口の奴から無理矢理押しつけられたかもしれないインフルエンザウイルスを折角暖かい蒸気で撃退しようとした矢先、俺の間合いを読んだかのように鳴り響いた声に首をすくめて見上げると団長様が喜色満面の笑みを湛えて胸を張り俺たちを見回していた。

そうだな、いよいよ冬休みだ、律儀に冬將軍もシベリアあたりから偏西風に乗せて援軍を呼んでるらしいから、またぐつと寒くなるな。

「そんなんじゃないの、大事なイベントがあるでしょう、もうキョーンしたら何時になったらSOS団員の自覚が持てるのかしら、ね、有希」

「クリスマス、イエスキリストの誕生を祝う日とされているが古代からは冬至を過ぎて太陽が復活するのを祝った風習であった物にキ

リスト教が……」

「有希、もうそれぐらいで良いわ。

ともかくクリスマススイブはSOS団にとっても大切な行事よ。

今年も鍋パーティーとキヨンの仮装は決定なんだけど、

問題はクリスマスプレゼントよね、みくるちゃん、どうしたい？」

「去年は、みんなで一つずつ持ち寄って、抽選でプレゼントを交換、
だったですよ？」

「そう、去年は普通のプレゼント交換だったわよね。

階段から転落して皆を心配させたどこかのトナカイさんだってそれぐらい覚えてるわよね。

だけど去年と同じ事をしていたのでは進歩というものが何ら感じられないじゃない。

1年分の進歩の成果を披露しなければサンタクロースだかイエスキリストだかしらないけど、それじゃ詰まらないって言うわよ。

そんな事じゃ真の奇跡も不思議な出来事も舞い降りてくるはずはないわ。

わかるでしょ、古泉君？」

「申し訳ない、どこがどの様に詰まらないのか、凡庸なる私にも分かるように教えて頂けませんか」

「いいこと、折角用意したプレゼントが誰の所に行くか分からないなんて、犯罪だと思わない？」

これって逆窃盗罪よ、絶対に。

そうよ、犯罪確定ね。

神聖なるプレゼントに相手を思う気持ち、『この人にはこれを』
って気持ちを込めることが許されないシステムを唯々諾々と受け入れることは明白な犯罪だわ」

「では、相手を選んでプレゼントしたい、でも、そうなるとプレゼントの行く先が集中する恐れがありますね」

「そうよ、古泉君。」

それはそれで困るわよね」

つまりはプレゼントを贈って、なおかつ何ももらえない人間が生じるという訳か、無尽蔵の小遣いでもあれば全員が全員にプレゼントをするというのも選択枝だが……

なら、先に抽選しちまったらどうだ、その相手にプレゼントを選べば良いじゃないか。

「事前抽選方式、私も推奨する」

「あ、それなら確かに送る相手のはっきりしますからプレゼントを選ぶのももつと楽しくなりそうです」

「古泉君、どうかしら？」

「涼宮さんが良いと思われる案に僕が反対する理由は何もありません、

なぜ今まで考えつかなかったのかと思う、良い案だと思います」

「でも、誰がプレゼントをくれるのか分かっていたら詰まらないですよね。」

だから誰がプレゼントの相手になったかは秘密にしくちやイケナイけれど、かといって普通に只籤を引いただけでは自分自身にプレゼントって言う事になってしまっっては困りますよね」

「かなたちちゃん、一年生の割には随分と先を見越した良い意見よ。」

キヨン、これにはどう答えるつもりなの？」

おい、ハルヒは賛成なのか反対なのかどっちなんだ？

大体いきなりそんな事を言われても俺が困る。うーん、じゃ、籤を引いて、だれかが自分自身に当たってれば全員で籤を引き直すつてのでは駄目か？

「やり直して点が引つかかるのよね、運命の女神にケチを付けるみたいでさ」

「私が引人数分の番号を二つずつを乱数で組み合わせるプログラムを組む、その際、同一の番号の組に成らないようなアルゴリズムを用いれば問題ない。」

自分が何番の番号に相当するかを決める籤を引けば公平性は保た

れる」

おい、古泉、今の説明で理解できたか？

「はい、長門さんにお任せすればよい、そうですね、涼宮さん」

「じゃ、その組を作るのは有希に任せるわ、私たちは番号の籤を引くだけで良いのね」

「そう」

「よし、じゃ、みくるちゃん、参加人数は私たち六人に鶴屋さんを加えた七人で籤を作ってちょうだい。」

あ、そういえば阪中さんにも声かけたんだっけ……」

谷口は『絶対クリスマスまでには彼女を作って二人でイブを過ごすから今年は俺を呼ぶな』と言ったけど、去年は国木田とかも呼んだんじゃなかったか、今年は良いのか？

「何よ、キヨンは国木田君からプレゼントが欲しいの、ふうん、変わった趣味ね。」

それとも国木田君は当て馬で、他にもっとプレゼントを貰いたい人とか、呼びたい人とか……

どうなのよ、キヨン、正直に白状なさい」

いや、俺としては安寧真っ当に楽しいクリスマスが送れば何も文句は言わん。

「何時もお世話になってる森さんとかはお呼びしなくていいのでしょうか？」

それと今年も映画とかでお世話になったですからやっぱり谷口さんとか国木田さんにも声は掛けた方が良いかもしれませぬね」

「そうね、森さんには何かとお世話になったわ。」

古泉君、連絡取って頂戴。

でもみくるちゃんは国木田とか谷口とか。あんなのが来た方が良いの？」

「あの、そういうわけじゃないんですが、えっと、クリスマスには喜捨の心も必要かなって。」

「じゃ、キマリ、みくるちゃんはマリア様のコスプレよ」

「えっ、でも私、新しいメイド服もせつかく用意しているんですけど……」

「けちけちしない、両方どーんと披露しちゃいましょう、いえ、待って、みくるちゃんがコスプレするなら参加費用をとって公開パーティーにすれば部費だってドドドドドーンと……」

「涼宮先輩、落ち着いてください、それじゃ趣旨が違っちゃいます」「そ、そうね、私としたことが血迷ったわ。

でも、多少は人数が増えた方が盛り上がるかもしれないわね。じゃ、有希と古泉君、涉外やってちょうだい。

今日はとりあえず私たちで七番までの籤を引きましょう、

あとは参加できる人数が決まってから。

有希は参加人数が何人になっても出来るように組み合わせ表を用意しておいて。

参加締め切りは今度の土用、20日の正午よ」

「あのお、鶴屋さんは此処に居られないんですけどどうしましょう？」

「みくるちゃん、そんなの今電話して籤を引きに来れるかどうか聞いたら良いじゃない。

ダメなら一つ残った籤が鶴屋さんの籤に決定よ」

「は、はい。今電話してみます、ちょっと待っててくださいね」

なあ、古泉、森さんに参加を頼んでも大丈夫なのか？

「勿論です。

涼宮さんの精神の安定を図る為なら最大限の協力をさせて頂きます。

ほら、涼宮さんが貴方に何か声をかけたそうにしていらっしやいますよ。

朝比奈さん、電話が済んだら私にもう一杯紅茶をお願いします」

「古泉先輩、アップルパイ、もう一切れ如何ですか？」

俺はかなたに押しやられるようにしてハルヒの座る団長席の横へと

赴いた。

どうした、ハルヒ、何か用か？

「キ、キヨンったら、べ、別に何でも、無いんだけど。」

その、キヨンってクジ運、悪いよね」

ああ、最高で町内の福引きでの四等だな。ティッシュの箱以上の物が当たったことがない。

「それって、やっぱり可愛そうかなって、それで、キヨンには特別籤の交換以外のプ、プレゼント、あげても良いかな、なんて、思わないでもなかったりして。」

べ、別に今ふつと、そう思っただけ。

気にしないで」

俺もハルヒには別にプレゼントを考えようって思ってたんだ。そうか、楽しみだな。

「約束だかね、忘れたら……」

分かってるって、死刑だって言いたいんだろ。

世の中にはいろんな季節がある、桜の季節、若葉の季節、紅葉の季節。食いしん坊の妹には焼き芋の季節もあるだろう、そして俺には去年からどうやらトナカイの季節なんてものが出来てしまったのかも知れない。去年は近所の子供に……なんて言われてかぶったのだが今年はこれを俺にかぶらせるためにハルヒの奴がクリスマスつてものを引っ張り出してきた、そんな気がするの俺のやつかみだるうか？

そう、俺の辛いトナカイの季節はこうして始まったのだ。

訳の分からない番号だけの籤を引いた後、長門がミミズがのたくった様な不思議な文字が印刷された分厚い書物を閉じ、解散となる。帰り道で俺はハルヒ達と手をふって別れると暗くなつた道を駅の方へと足を進めた。

しかしあのハルヒへのプレゼントを忘れるなど後さんざんハルヒ

に念をおされたつてのは、俺がそれほど忘れっぽいとかドジだとか思ってるんだらうか？

実のところ、俺はハルヒに渡すプレゼントはもう決めてあるんだ。それはフワフワの毛皮の襟巻き。団活が終わって外に出る時、ハルヒがいつもふつと首をすくめるのが気になつてな。もちろん黄色の毛糸のマフラーしているのは見てるんだけど、街とかで毛皮に襟巻きを暖かそうにしている女の子を見かけるとハルヒにも暖かくさせてやりたくなるんだ。別にハルヒに首輪を付けようとかそんなフロイト先生じみた理屈が有る訳じゃないぞ、断じて違う。あいつにはむしろ首輪じゃなくて鎖をつけて放し飼いにしないようにするべきじゃないかと思うが。

長門が俺に用意してくれたクレジットカードは未だ有効だし一度残高を心配して聞いてみたが一言『心配ない』と言われただけだった。だがせつかくハルヒに選んだプレゼントなら自分でなんとか稼いだ金で買ってやりたい、だもんで実は最近バイトをしている。日曜の夜や休業日とかに店のショーウィンドウの飾り付けや内装を変える作業の手伝いのバイトなんだが、先月末から数回ハルヒにはナイショで働いて来たわけだ。おかげでバイトの翌日はハルヒに今日も性根が無いとか散々に嫌みを言われたりブレザーの背中にシャーペンで刺された痕が増えたりしたのだが、おかげで今日の俺の財布のカード入れの裏には諭吉さんが何枚か畳んで仕舞われている。

お袋にはバイトは参考書とクリスマス会用の資金の調達だと説明した、もちろん参考書だつて買うには買ったし、クリスマスプレゼントに使うのだから嘘偽りではない。

駅に着くと俺は切符を券売機から買い、疲れ果てたサラリーマン達や部活を終えた帰り道であろう学生達に混じって電車で揺られバイトで行ったことのある商店街へと向かった。年末のバーゲンでそこそこ賑わうテナントビルなどを少々恥ずかしい心持ちでフラフラと歩き回る。本当なら週末に買い物に出れば良いんだらうがハルヒの事だ、絶対何かしらイベントを持ち込む確率が高い、いきお

い俺がハルヒの目を離れて自由に買い物して探し回る時間が無くなるの確実だから仕方なし、といった所か。しかし買い物客にはマスクをしているオバチャンが結構いるな、巷では本当にインフルエンザとか流行ってるんだな。

いいかげん足が疲れた俺は地下街の一角で自販機を見つけコーラを買ってその場で飲み干す。地下道はやけに乾燥しているからか喉がからからになっていた。目の前を右に左に忙しそうに人々が通り過ぎる。立ち止まると足元からゾクゾクつと冷気が上がってくる寒さに、いまや本当の真冬が来ている事を実感する。

ブルツと身震いして俺は再び雑踏の中に身を投じた。

いいかげん疲れた頃、店先のウィンドウの片隅にあった青っぽい銀色のファアの襟巻きが目にとまった。値段は何とか俺の手持ちで買える範囲、フワフワで暖かそう。俺は店の人に頼んで出してみせてもらう。さわり心地が本当に良い、柔らかい毛並みがふわつと立って、ハルヒに似合いそうだ。

「此は良い物ですよ、スカンジナビアものですから暖かですよ」
勧められるまでもなく、俺はは迷わずプレゼント用に包装してもらい店を出た。襟元からも何となく冷気が入ってくる寒さに震えながら俺は早々に家に帰ることにした。

家に着くと他のみんなはもう食事を済ませていたので一人で残り物の汁を温めて晩飯にするとテレビを見ていたお袋と妹に声をかけてから自室へ戻り、そのままベッドに倒れ込んだ。

どれぐらい眠っていたのだろう、ビビビビと腕時計が振動して目覚める、異様に寒い。部屋の灯りも付けたままベッドの上に倒れて眠っていたようだ。

KANATA・M< キョン先輩、お布団に入ってください、風邪引いちゃいます

かなたか、すまない、長門はどうしてる？

KANATA・M< 有希姉さまはお客様とご一緒です、私、コン

ビニに買い出しに出たところですよ。

え、珍しいな、長門に客人だなんて。

KANATA・M< キョン先輩もご存じの方、私の詳しい素性や、キョン先輩の時計の事は知られたくないんです

ということはインターフェース、喜緑さんか？

KANATA・M< いいえ、朝倉先輩です

まさか、また俺を狙いに来たのか？

KANATA・M< 違います、多分。思念体が有希姉さまの暴走を戒めるため、一年後に期間限定で再構成したってご自身でおっしゃってました

う、嘘だろ、そんな話なんか聞いてないぞ。

KANATA・M< 私も、有希姉さまです。キョン先輩を襲ったのは急進派により操られたから、本当は嫌だった、有希姉さまと一緒にいたかつたって……

全く話が読めない、仲違いとかしてたんじゃないのか？

KANATA・M< いいえ、ゆきりん、涼ちゃんって、仲良しです、私、オデンを頼まれて買いに来てるんです

嘘だ、信じられない、あの、朝倉だぞ

KANATA・M< たとえ何があっても私がキョン先輩は守りますから、でも、危険を避けるためキョン先輩との直接の接触は暫く控えます

KANATA・M< 先輩のモニターも私一人ではばらくは担当します、ごめんなさい

分かった、ともかく無理はするな、長門が優秀って言っていた相手だからな。

KANATA・M< はい、有り難うございます。キョン先輩もちゃんと寝てくださいね

ああ、おやすみ。

今の話ですっかり目が覚めてしまった。時刻はすでに十一時を回っている。俺はハルヒの為に買ったプレゼントを紙袋からそつと

引つ張り出す。赤と緑と金色の包装紙にくるまれたそれを渡したときのハルヒの表情はどんなだろう、喜んでくれるだろうか、ちゃんと身につけてくれるだろうか？少しでもハルヒを寒さから守ってれるだろうか？

喜んでくれたら良いな、思わずゆるんだ口元から唾液がこぼれそうになる、馬鹿だな、俺は？

買い物袋に戻すと妹に見つからない様に机の後ろに俺の体操着を乗せてとりあえず押し込む。

再びブルッと悪寒が俺を襲う、寒い、やっぱり布団に入って寝ちまえ。長門の事は布団の中で考えよう、しかし寄りによって朝倉とは、長門、あなた、大丈夫だろうな……

しかし寒い、こんなの寝れるものか、寒い、だから寝れないぞ、ったくハルヒの奴今頃何をしてるんだろうな、もう寝てるかな、はっ、俺は何を考えてるんだ？

だけど、朝倉か、あなた……

第一章 トナカイの季節 12月19日

グワシつと背中の上にかかった重みで息が詰まる、この重さはシヤミじゃないな、ハルヒよりは軽い、つてか、そうそうハルヒが来てはたまらん、妹だな。降りろ、死ぬ！

「残念でした、私とシヤミのダブルアタックだよ」

みやあとガラにもない可愛い声をだしてシヤミが俺の頭を乗り越えて俺の枕を占拠する。

「ほら、シヤミが寒がつてるから場所替わってやって、朝ご飯、早くう」

お前は実の兄と猫とどっちが大事なんだ。

「そんなの決まってるじゃない、ね、シヤミ、やっぱりおいで、そんな所で寝たらムサイのが感染するから」

感染するか、そんな物。しかし、体がだるい、食欲もまるでない。「あ、寝間着に着替えてない、じゃ、お風呂も入ってないんだ、信じられない」

ダダダダつと走って出て行った妹を見やりながら時計を見る、ヤバ、ゆつくりしたら遅刻じゃないか。

俺は痛む節々にむち打って漸くベッドから這い出し着替えを持って風呂場に行く。とりあえずシャワーだ。

なかなか暖かくなならない勢いの無いシャワーを浴びて一層気分が悪くなつて風呂場を出る。鏡を見ると目の下に隈が出来て腫れぼったくなっている。下を向いて寝ていたからか？ まったく最悪を絵に描いたような朝だ。

朝飯は明らかに昨夜の鍋の残りに味噌を溶き入れた味噌汁にトーストという得も言われぬ最悪の組み合わせ。味噌味の汁にマーガリンが塗られたトーストを千切って浸けてなんとか口に押し込む。以前かなたの作ってくれた朝飯が恋しいぞ。

何時もにも増して回らない頭でなんとか荷物を用意して鞆に詰め

込み家を出る、ペダルを踏む膝が明確に痛いのは何故だ？ 今朝の妹とシャミのダブルアタックのせいなのか？

しかし今日の寒さは格別だ、吹き付ける風の中に氷の刃が隠れていても不思議じゃないと思えるほどだ。ペダルは重く、頭も重く、ようやく自転車置き場にたどり着くと足を引きずりながら延々たる坂を上り始めた。

その時俺の背中をバチンと叩いて駆け抜ける奴が居る、おい、待て、谷口、何のつもりだ？

「よ、背中丸めて湿気た面して、キヨンは相変わらず冴えないな。俺なんか見てみる、元気いっぱいだぜ」

インフルエンザだとか言って昨日は咳も出てへ口へ口だったんじゃないのか？

「そんなもの、すっかり治っちまった。

気力だけ、俺の運気は最高にエキスパンダーしてるぜ」

意味不明な言葉が混じった気がするが、とりあえず無視して聞いてやる。何か良いことでもあったのか？

「おうよ、今年はロンリークリスマスとはオサラバだ。

俺の運勢最高だったよ、ずえったい確保だぜ、メチャ可愛い彼女をさ。

張り込むぜえ、プレゼント。

つてな訳でキヨンは精々愉快的な仲間と宜しくやってくれよ。

「じゃな！」

そう言つと走るようにして坂を登って行ってしまった。

嘘だろ、俺は夢の中でまで通学しているのか？

呆然としながら足早に登っていく生徒達に追い抜かれながら俺は再び坂を上り始めた。異様に体が重い、そして寒い。谷口の奴、俺の僅かに残っていた生気を奪いやがったに違いない、ああ忌々しい忌々しい。

俺が靴を履き替え教室にたどり着いたのは朝のショートホームルーム直前、滑り込みであった。去年の様にいきなり風邪を引いた生

徒が増えたわけでもなく、我らが団長様もすっかりいつもの positioning に座りぶすつと外を眺めている。昨夜朝倉の事を聞き一瞬俺の脳裏を過ぎった恐怖は幸にも現実とはならなかったようだ。

「キヨン、何しけた顔してるのよ、情けないわね」

おい、ハルヒ、顔も見ずにいきなり失敬な奴だな。

「その怠そうな足音とガラスに映った陰気な顔を見れば振り向かなくたって分かるわよ。まったく気合いの欠片も無いって信じられないわ」

俺だつて好きでこうしてるわけじゃない、谷口の野郎に生気を奪われたみたいで今朝から、いや、昨日から妙に寒くて体が重たいんだ。

そう俺がぼそぼそと答えるとハルヒはいきなり俺の右肩を掴んでぐいっとばかりに後ろに振り向かせる。おい、ホームルーム中だぞ。そう言おうとした瞬間、俺の目の前にハルヒのおでこが現れ猛烈な頭突きを食らった。それだけじゃない、両手で俺の耳を掴むとぐいっと頭を押しつける。

ふいっとハルヒが俺の耳を放したせいで一瞬尻餅をつきかける。

「キヨン、あんた馬鹿」

何だ、藪から棒に。

「メチャクチャ熱あるじゃないの、信じられない。」

あんたは風邪、悪性の風邪、

馬鹿でもかかる奇跡の悪性風邪よ」

じゃ、この寒気は熱のせいなのか、飯が食いたくないのも、体が怠いのも、全部風邪のせいなのか？

「そうよ、団活休んで良いからとっとと気合いで直しなさい。」

もう消化授業なんだから、さっさと帰ったらどうなのよ」

そうか、そうかもしれない、そう言われたらそんな気がしてきた。だけど、今着いたばかりだ、少し休んでから帰らしてくれ。

「秘孔、鎮静の壺、さっさと寝る」

そう言うなりはるひは俺の首根っこを指でぐいっと突いて俺の頭

を机に押しつけた。

「こ、殺される……」

「お菓子と料理づくりの大切な戦力を保護しないと駄目よね。」

有希にもかなたにも、みくるちゃんにもキヨンの半径二十メートル以内への接近禁止指令をださなくちゃいけないわ。

キヨンは大道具と飾り付けの仕事を残して置いてあげるから二十四日の朝までに気合いで完全治癒しなさい、命令よ！」

ハルヒによる強制睡眠により俺は午前中、唯々机につっぱして寝ていた。そのおかげか、短縮授業となっていた今日の授業がすべて終わる昼頃にはなんとか歩ける様になっていた。

「キヨン君、ずっと寝てたけど調子悪いのかい？」

あ、国木田か、どうも風邪気味らしい、ハルヒに気合いで治せって強制的に寝かされていた。

「相変わらず仲が良いんだね。僕は明日明後日模試だけど、後は空いているから、二十四日は参加させて貰おうと思うよ。でも谷口はなんだか予定があるって言うっていたから、あまり当てにしないでおいでやってくれるかな」

ああ、分かった、多分、覚えてると思う。ハルヒの思いつきでちよっと面倒なプレゼント交換だけど、相手が決まったら連絡するから。

「そうか、お大事にね、じゃ、また、月曜休みだから、今度は火曜の終業式だね、じゃ」

あいつ、勉強がそんなに好きなのか？ ついこの間期末試験が終わったばかりなのに模擬試験か、ご苦労な事だな。

「キヨン、ブーツとしてないで、気力で治しなさい、ま、医者に行くなって言ってる訳じゃないけど、ちゃんと大人しくしてなさいよ。フラフラ出歩いているの見つけたら殺すわよ」

あいもかわらず物騒な奴だが、とりあえずは心配してくれているのだろう、じゃ、みんなに宜しく、籤の結果、わかったら知らせてくれ。

俺はそうハルヒに頼むとよるよると下駄箱を目指して教室を出た。
廊下はやっぱ寒い、寒い、寒い。
帰ったら飯喰って寝よう。

自転車を漕ぎようやく家にたどり着くと家はもぬけの殻、お袋は
買い物か、それともどこかへ遊びに行ったのか？

独り鍵を開け、ひんやりとした家に入る、台所へ行くが昨日の汁
も流石に残っていない。炊飯器も空。
弱り目に祟り目ってのはこの事か？

俺は仕方なく冷蔵庫からジュースを引っ張り出して冷たさに震え
ながら一杯飲んで喉を潤すと自室で布団に潜り込んだ。今日はちゃ
んと寝間着に着替えたが、どうしたって寒い物は寒い、腹減ってる
ような、何も食べ物が欲しくない様な……体がだるい、もう、ど
うでも良いから寝るしかない。

結局脳天気なお袋が帰ってきたのは暗くなってからだった、妹と
待ち合わせをしてバーゲンセールに行き、ついでに飯も食って帰っ
たらしい。

震えながら台所に呼び出された俺はお袋がデパートの地下で買った
たという冷えた弁当を半分ばかり食べると、再び布団に潜り込んだ。
だんだんと頭が痛くなり、咳も出始めた、やっぱ風邪なんだろ
うな、一晩寝たら、治るとんだらうか……

その夜、俺は痛む頭と節々を抱え、熱で朦朧としながら悶々と身
もだえた時を過ごした。

第一章 トナカイの季節 12月20日

翌朝、お袋と妹に蹴り出されるようにして俺は近所の開業医へと行き、そして、俺は凍えながら開業医の看板の前でお袋に電話を掛ける羽目となった。

『今日、土曜で休みだつて、

うん、クシユ、仕方ないだろ、俺のせいじゃない。

わかつた、救急病院、うん、探して行ってみる』

俺は仕方なく重い体にむち打って駅まで歩いてたどり着くと電車に乗って電車の窓から以前見かけたことがある隣の町の救急病院を目指した。時間外受付というやつをして紙切れに症状とかを書き込み、風邪らしいと言うと紙製のマスクを渡されてから漸く建物の中に入れて貰う。薄暗い待合にはすでに何人かの人が順番を待っていた。俺の前は見知らぬ高校の詰め襟に身を包んだ明らかにヤクザっぽい目つきの悪い男が小柄な妹かなにかを連れて待っている。身内には優しいんだろう、やはり風邪で熱が出たらしくマスクをさせられグツタリとした小柄で長い髪の毛を振り乱したの女の子の世話を甲斐甲斐しくしている。女の子は熱でうなされてでもいるのか小声でブツブツと呟いているのが聞こえる。

「私、死ぬのよ、黒猫野郎の祟りよ。」

ね、竜次、此処の雰囲気、嫌な思い出が有るような気がするけど、気のせいよね」

「タイガ、あのときはたまたま医者のがあたりが悪かつたんだつて、救急やつてるのはこのあたりじゃ此処しかないだから、な、大丈夫だつて」

まったく変な二人連れだが、俺も熱で相当に参って震えながら只ひたすら順番を待つ。

「愛坂さん」

さっきの二人連れが看護婦に呼ばれて入っていったと思つたらも

の五秒でさっきの少女が鼻を押さえて飛び出してきた。

「竜次、鼻を刺された、私、出血多量で死ぬ、ね、見て、止まらな
い、鼻血でしょ」

「馬鹿、そりゃただの鼻水だ、ほら、これで拭け」

「一体何の騒ぎだ？ 訝るうちに俺も呼ばれる。」

「はい、インフルエンザの検査するから鼻出して」

年配の看護婦が俺の鼻に綿棒をぐさつと突き刺した、さっきの女
の子が言っていたのはこれか、確かに痛いというか、恐ろしいぞ。

「十五分ほどで結果が出るから待合で待っててちょうだい」

俺は痛む鼻を押さえながら涙目で待合室に戻る。せめて医者はマ
トモでないと、さっきの子じゃないが殺されるかと思った。

やがて女の子が呼ばれて診察室に入る、と、これまた五秒で飛び
出してきた。

「竜次、殺される、またあの医者よ」

走り去る女の子を追って診察室から注射器を持った看護婦が追
かけてくる。

「熱冷まし注射します」

「ダメだって、私鎮痛剤とか解熱剤アレルギーだって。」

「ギャー、殺される、犬、竜次、なんとかしなさい」

まったく騒々しい奴だ、ハルヒでもあれほどは騒がんぞ。

「仕方ない、じゃ次呼んで」

診察室の中から間の抜けた声がして俺は看護婦に手招きされ診察
室に入った。

「熱は三八度超してるね、頭痛いよね、ハハハ、出ちゃったよ、ほ
ら、インフルエンザ、陽性だって。」

A型が出てエガツタってね、怪しくてもなかなか判定で出ない
んだよね。

ちなみにねB型の時はビービツタなんだよね、ハハハ。

君、まだ十代だよ、インフルエンザの特効薬、十代は禁忌にな
っちゃってね、前はバンバンだしてたけど、薬屋さんうるさくって

ね。

どうする、漢方薬でも出そうか、どっちでも良いんだけどね、若いから放っておいてもそのうち治るって。

熱冷ましも出しとくけど、九度近くにならなかつたら使わない方が良いんだって。

これも言っておかないとオーベンが五月蠅くってね。

はい、混んでるからもう良いよ」

椅子にふんぞり返った若い医者が殆ど俺を見もせず机に向かつて何やら書くとブツブツいいながらコンピュータを操作し始めた。

本当にこの医者大丈夫なのか？

俺がぐったりとした顔で診察室を出て思わず足元を引っかけて倒れそうになった。待合室で待っていた人たちの間でどよめきが漏れる。俺、何かしたのか？ ふらつく足元で会計に向かうとゾロゾロと待っていた人が立ち上がり、と見ている内に待合室で待っていた半数以上の人たちが一斉に小走りに帰り始めた。残った人も不安そうに辺りを見回している。俺の次に呼ばれた人の返事は声が裏返っている。それを聞いて残りの人も一斉に席を立てて帰り支度を始めた。呼ばれた人は助けを求めるように後ろを振り返りながら鼻攻撃看護婦に引きずられて診察室に入ってしまった。

俺は薬局で麻黄附子細辛湯とかいう漢方薬とうがい薬、トローチ、解熱剤を受け取り虚ろな目でとぼとぼと駅を目指して歩き始めた。ビビビビと時計が震える。

KANATA・M< 先輩、熱が上がってきてます。早く帰ってくださいね

KANATA・M< 皆で買い物中なので先輩の所に行けません、ご免なさい

かなたか、やっぱりインフルエンザだそうだ、薬もらったから大丈夫だろうと思う。長門と朝倉はどんな具合だ？

KANATA・M< ラブ？ラブです

嘘だろ、信じられない…… 益々俺の熱が上がりそうだ。

俺は更なる衝撃を受けて電車に乗り込んだ。寒い、頭痛い、体痛い、もう最悪だ。どこかで誰かが俺の不幸のバランスを取ろうとしているなら俺には相当幸福のチャージが出来ているに違いない。遂に足元がフワフワして歩いている感覚すら覚束なくなった頃、漸く俺は我が家に帰り着いた。再び今日も他の家族はシャミを残して全員留守、食卓には冷え切ったコンビニ弁当が申し訳程度に置いてある。はあ、ハルヒの弁当が恋しいぜ、まったく……

俺は無理矢理弁当を半分ばかり食い終わり薬を飲もうと例の漢方薬を取り出した。が、そこに書いてあった言葉は……毎食前に服用してください……折角、薬飲むからって無理して喰ったんだぞ、藪医者め、ちゃんと説明師やがれ、いや、ひよっとしたら薬局で言われたのか？ そうかもしれないが完全に熱で頭がボーッとしていたから覚えちゃ居ない。仕方なく俺は食後に不味い漢方薬を飲んでみた。

飲むタイミングが食後だったからか、医者の見立てが藪だったのか、谷口が押しつけたインフルエンザが強力だったからか、はたまた俺の不幸のバランスがまだ不幸に傾き続けているからなのか俺はその日もぐったりと布団に突っ伏して昼に何かメールが入っていたがそれすら見る気力もなしに過ごすことになった。

すっかり暗くなり携帯に着信ランプが点灯しているのに気づいて見ると朝比奈さんと長門からメール送られてきていた。

「キヨン君、風邪は大丈夫ですか？」

今日はみんなでクリスマスパーティーの用意の買い物でした。

涼宮さん、とっても張り切って居られました、どんな物を買ったのかは楽しみにしててください。

番号の抽選が終わり対応表が出来ましたので送りますね、私もよく分からないですけど後で長門さんがプレゼントの相手の番号を送ってくださいるそうです。

キヨン君は誰からももらえるんでしょうね、そしてキヨン君は誰に

あげるのかしら？

キヨン君から貰えた人はとっても幸せですね、では番号表です。
長くてご免なさい。

鶴屋さん 4

涼宮さん 3

古泉君 6

朝比奈みくる 7

長門さん 1

キヨンくん 5

かなたちちゃん 2

森さん 11

阪中さん 10

国木田さん 9

谷口さん 8

早く良くなってくださいね、とても心配しているみくるより？』

もう一通の長門からのメールはいかにも長門らしいく簡単かつ素
つ気ない物だった

『1

治癒祈願』

つてことは、俺は長門にプレゼントを贈るのか……

俺はベッドで天井を見上げながら長門へのプレゼントを考える、
まず考えつくのはハルヒと同じくマフラー、長門はウサギを随分気
に入っていたから真っ白なウサギのマフラーなら喜んでくれるよう
な気がする。ただ問題は間近でかなたがどう反応するかだ、かなた
はウサギのマフラーとかを見たら泣き出すかもしれない。さて、困
ったぞ。

思い切つてか・な・たと三度時計に触れる。

KANATA・M< どうされました、具合が悪いですか？

いや、俺、クリスマスのプレゼントを贈る相手が長門になったんだ。何を長門にプレゼントしたらいいと思う？

KANATA・M< キョン先輩

なんだ？

KANATA・M< だから、キョン先輩

ああ、ちゃんと見てるぞ。だから、俺に何の様だ？

KANATA・M< プレゼントはキョン先輩

だから、困つて相談してるんだ。

KANATA・M< 鈍キョン!!!!!!

それつきりいくら呼んでも返事がない、朝倉と何かもめてるんじゃないだろうか？

多分かなたも忙しくて俺の相手まで出来ないのだろうな。

久しぶりに俺は本当にひとりぼっちになった気がした。そうか、一人でいるのはこんなにも心細いものだったんだ。

今夜はまだ十二月二十日、あと三日の内に長門に送るプレゼントをなんとかしても考えつかなくては。

俺が再び眠りの闇に落ちようとした時、ど派手な携帯の呼び出し音が鳴り響いた。これは、ハルヒ……

『キョン、生きてる？』

『ああ、なんとかな。』

今朝医者に行ってきた、インフルエンザだそうだ。

漢方薬とかの薬を出して貰った』

『ひ弱にも程があるわ、

ちやつちやと治してよね。』

今から顔見に行つてあげようか』

『ハルヒにうつしたくない。』

我慢するよ』

「馬鹿、私は気力充実してるから大丈夫」

言ったきりいきなり電話を切りやがった。家にはまだ誰も帰ってきてないぞ、マジで来るつもりか？

突然玄関の扉をガタガタと揺らす音がする、呼び鈴も押さずに、誰だ、泥棒ならもつと静かにするだろうからお袋か妹が鍵を落としたりかハルヒに違いない。

這うように玄関に出ると摺りガラスの向こうに白いモコモコとした服を着た姿が揺れている、やはりハルヒだ。鍵を開けるとフカフカのダウンを着たハルヒが飛び込んだ。

おい、うつしたくないから来るなって言ったろ。

「来ちゃったモン。」

どうしたの、お母さんとかは？」

薄情な奴らは朝から俺を置いて出かけてる。

「キヨン、ちゃんと食べて水分摂ってる？」

一日見ないうちにゲツソリ糞れてるじゃない。

髭も痛そうに伸びてるし、マジでキヨン死ぬかもよ」

ハルヒに言われたら本気で死ぬような気がしはじめた、なにしろこいつは古泉曰くの神様だからな。

「それにしても見るからに不健康な部屋だわ。良いこと、暖房すれば良いってものじゃないのよ。」

加湿と換気をちゃんとしないとダメなんだから」

そうなのか？ 俺、寒くてガンガンにエアコンかけてたんだけど。

第一、換気つて、窓開けたら寒いじゃないか。

「あんだ、本当につくづく馬鹿よね。」

ずっと開けて無くて良いの、一時間に一回ぐらいでいいのよ、それより加湿よね。

どうせキヨンのことだから加湿器とか持ってないでしょ。

そうだ、マスクよ。

マスクすれば自分の吐く息で加湿できるじゃない。

持ってないの？」

薬箱に入ってたかもしれないけど、何処にあるか俺では分からないぞ。

「それじゃ、私のあげるわ」

ハルヒはそう言うのとダウンのジャケットのポケットからガーゼのマスクを取り出した。

同じくポケットからティッシュペーパーをとりだし、一枚を折ってマスクの内側にあてるとやおら俺の耳を引っ張って俺にマスクをさせる。

「ティッシュ取るんじゃないわよ。」

私が一度使ったのだからリップとか付いてるから。

良いこと、ティッシュ取ったら殺す！」

わかった、ありがとう。なんだか鼻が乾いていたのが治りそうな気がしてきた。

「大体、キヨンは気合いのレベルが著しく不足してるんだから、ちゃんと暖かい服を持ってるの。」

マフラーとか手袋してるの見たことないけど、何か理由でもあるの？
「ただ持ってないだけだ、昔お袋がマフラーを買ってくれたんだが、初めてしていった当日に自転車のチェーンに絡めてポロポロにしちまったんだ。それ以来、どうも俺にはマフラーに縁が無いような気がする。」

手袋は自転車乗るのに滑るだろ、だからやってない。

「やっぱりキヨンは天然の馬鹿ね、そのうち環境省が登録に来るわ、保証してあげる。」

それでちゃんとご飯は食べてるの？」

昼飯はお袋がコンビニの弁当買っておいしてくれたから半分ほど喰った。

「その後は？」

何も、欲しくないし、面倒だし。

「お茶は？」

薬飲むのに水を少し。すまん、ハルヒ、ちょっと横にならせてく

れ、腰がだるいんだ。

「そんなの、キヨンの家なんだから好きにしなさいよ。

待ってなさい、何か食べれそうなもの作ってあげるから」

そう言うなりハルヒは俺の部屋から飛び出していった。

頭が痛いんだから、そう四六時中バーゲンセールするみたいに大声でまくしたてるなよ……って

聞いちゃいないか。

「キヨン、今日は病人だから特別に団長自ら世話をしなさいよ。

だから気合いをいれてしっかり病人をするように。

いいわね。

だけど、間違えるんじゃないわよ、これはキヨンが病人だから特別にするんだから。

いいこと、病人は絶対服従よ!!!」

言われなくても分かっているさ、俺だっていつも以上に体力気力が落ちてるんだ、もうハルヒに言うがまま、これ以上体力を消耗したら命に関わるような予感がビンビンにするからな。

というわけで、その後ハルヒは病人という玩具を与えられいとも甲斐甲斐しく俺の世話をしてくれた。

暖かい物と水分で事実少々元気が出たのだから感謝するのに吝かではないが、おい、頭からすっぱりと俺に布団をかけておいて俺の部屋で何をゴソゴソと漁ってるんだ。

「キヨンはじつとして黙って寝てなさい、動いたら死刑よ」

明らかに押し入れや引き出しを引っかき回してる音がするんだが、おい、ハルヒ……

「五月蠅い！ 集中できないじゃないの」

お袋達が帰ってくると漸くハルヒは家捜しを終了し、お袋に礼を言われながら意気揚々と帰って行った。あいつ、いったい何を探していたんだ、何か持ち去られていないか体調がもどいたら徹底的に調べないと、う、頭痛い。また熱が上がってきたのだろう、俺はハ

ルヒに被せられた布団のなかで震えながら再び眠りについた。

携帯の呼び出しで目が覚める。誰だ？

『ご苦勞様です、お加減は如何ですか？』

古泉か、ご苦勞様って、何だ？

『いえ、おかげさまで、今夜涼宮さんがそちらに行かれてからすつかり落ち着きました、

ええ、例のバイトですよ』

『ハルヒの奴、俺が起きれないを良いことに病人の俺を玩具にして寝かせつけて意気揚々と色々嗅ぎ回って帰って行ったぞ』

『もう今後ずっと貴方には病人を続けて頂きたい位です、

いえ、もちろん冗談ですが』

『お前が言つと冗談に聞こえないぞ、機関で変な病原体とかをばら撒くんじやないだろうな』

『なるほど、それは名案です、報告しておきましょう』

『おい、冗談だろ、止めてくれよ』

『おやすみの所失礼しました、どうか……』

おい、ちゃんと返事をしろ。

『あまり早く全快されずにクリスマスパーティーまでゆっくり休んでください』

おい、クリパまでって……

『では、失礼しました。』

二十四日、お待ちしております』

『明後日は絶対直して学校に行くぞ、成績表受け取らないと間違えてハルヒに奪われたら大変だからな』

『承りました、涼宮さんに代わりに受け取って頂ける様に手配いたします』

そのまま電話がプツツと切られた。おい、古泉、いい加減にしろ！

俺の声が部屋に虚しく吸い込まれる。

おっと、メールも来ていたのか。

『キヨン君、具合は如何ですか？

みんなとても心配しています

早く良くなってくださいね

クリスマスパーティーで元気なキヨン君に会えるのを楽しみにしています

キヨン君に早く良くなつてほしいみくるより？』

ありがとうございます、朝比奈さん。ですがやっぱりクリパまで俺は冬眠ですか……

『有難うございます、インフルエンザだそうです

がんばって直します、早く朝比奈さんの淹れて下さるお茶が飲みたいです』

朝比奈さんに悪気はないのだから素直に感謝しておこう。

携帯で朝比奈さんにメールを打っていたら目が冴えて眠れなくなつてしまった。

パジャマの上にセーターを着込んで居間へ行くと妹にリアル猫パンチを食らってしまった。

「インフルエンザは来ちゃだめ」

と言って抱き上げたシャミの前足を持つて、それでオレの手をパンチしてくる、シャミときたらだらしなくされるがままに妹を見上げてあくびなんぞをしている、働いたご褒美にマタタビでもねだるつもりだろうが妹にその気が無いと見て取るとフサフサとした前足をぎゅっと前に伸ばし、ぐいっと体を捻るとストンと着地し、俺を哀れむようにちらりと見ると伸びをしてから餌入れの方へと行ってしまった。

ドタドタとおいかける妹を置いて俺は台所でお茶を一杯飲んで再び部屋に戻る。

机の後ろに隠した袋を確認すると、上に置いてあった俺の体操服が功を奏したのか置いたままの状態で放置されている。妹だけじゃなくハルヒもどうやら無視してくれたようだ。

さて、懸案の長門へのプレゼントだが、ふらふらと買い物に出て

万が一ハルヒに見つかったら困るし、第一、いつ買い物に出られるように回復するかも不透明。こうなったらインターネットで注文をするか、長門はネットで色々買っているとか話しを聞いたことがある。

長門に以前紹介して貰ったネットの巨大店舗をさまよっているとふとシャミの手が温かそうだった事を思い出した。そうだ、フワフワの手袋、真っ白な手袋させたら長門、一層可愛くなるぞ。

探してみるとロングファーの白いミトンを発見、妹へのプレゼントにも手袋を選び、即代引きで注文する、休日が入るけど、大丈夫だろうか？ 念のためクリスマスプレゼントにつき23日必着、プレゼント用の包装をお願いしますとコメントを付けておく。さあ、後はしっかりインフルエンザを治すだけ、あ、ハルヒの家捜して無くなった物が無いか確認しないと、でも、また腰と膝と頭と首が痛くなって寒気もしてきた。

洪々PCの電源を落として部屋のペンダントライトを消すと布団に潜り込んだ。

あ、ハルヒが作ってくれたの食べてから晩飯喰ってない、でも良いか、腹減ってこないから。

第一章 トナカイの季節 12月21日

夜中に無茶苦茶変な夢を見たけれど、俺はフロイト先生でもフアインマン博士でもないので夢解析なんぞする来もないし、第一目が覚めたとたんに忘れちゃった。

さて、そろそろ日付の感覚がおかしくなってきた、今日は何日、何曜日だ？

カレンダーで確認する、十二月二十一日、日曜日か。ベッドから起き出してセーターを パジャマの上からかぶって台所に行くともうみんな朝食を済ませていた、むしろ何をしに起きてきたと言いたげな様子ですらある、インフルエンザという病名を受けたらそんなに悪者にされちゃうのか？

言われるままに体温を測りながら、それでも取り分けてあつた朝飯に向かってみるが食欲すらまだ沸いてこない。体温は八度五分、体がだるいわけだ。

しかたなく蜜柑を二・三個ひっ掴むと部屋にもどって布団に潜り込む。大して効いた気がしないし不味いので薬はとうに止めてしまっている。ふと携帯を見るとメールが入っている、だれだ？

国木田か、どうした風の吹き回しだ？ おれの体調を心配してくれてるのか、残念ながらおれのプレゼントを贈る相手は国木田じゃないからこれでプレゼントのグレードが上がる訳じゃないか、意外と律儀なやつなんだな。

『インフルエンザでまだ熱がさがらなくて少しふらふらしてるけど、24日までには治ると思う
心配してくれて有り難う』

今日も模擬試験なんだろ、頑張ってくれ』
我ながら心がこもっていないし文面は平仮名ばかりだとは思うが、今日の俺の気力じゃこれで精一杯だ、済まぬ。

俺は携帯を手に握ったまま布団に潜り込んで丸くなる。ハルヒが

置いていってくれたマスクを見ると確かに微かにピンク色のリップの跡が付いている。まったく、ティッシュを挟んで使って、これじゃティッシュ越しにハルヒとキスしてるみたいなものじゃないか、とは言ってもたしかにマスクしてると楽だから背に腹は代えられず言われたとおりにマスクをしておく、直すぞ、絶対直すぞ、去年のクリスマスパーティーみたいに懸案事項を頭のすみに抱えず心から楽しめるクリスマスパーティーなはずなんだからな。まさか朝倉がクリスマスプレゼントにサバイバルナイフをもう一度突き刺しにやってくるなんて事も無いはずだ、だよな、かなた。だよな、長門。

昼からお袋も妹も出かけていった。妹は昨日は映画を見に行っていたとか言っていた癖に今日はまた何をしに出かけていくんだ？

仕方なく俺はその後もただひたすらダラダラと眠り続けたのだが夕方になり一昨日の朝以来シャワーも浴びていないことに気づいたとたんに寝汗が気持ち悪くなり風呂場でシャワーを浴びていると玄関で呼び鈴が鳴る。頼んだ荷物が宅配便で届いたのか？

俺は大声で返事をするると大急ぎで脱衣場に投げ捨ててあったお袋のナイトガウンといえば聞こえが良いが要するに寝間着の上に羽織っていえ夜つるつるする時に着ている長い部屋着を素肌で羽織って玄関に出た。開けた玄関先に立っていたのはまったく予想外の人物、俺のかつての同級生、佐々木だった。

「キヨン、君って奴は」

佐々木！

しばし絶句してお見合い状態の後、佐々木が大慌てでボタンと扉を閉じる。

俺も着替えてくると大声で叫んで風呂場へとって返した。

まったくんでも無い奴にとんでもない遭遇をしちまったが、なぜだ、ホワイ、アンビリバボーな状態を誰が仕組んだ？頼む、だれかこの居心地の悪い状況をなんとかしてくれ！

ちゃんとパジャマに着替えて上からとつくりのセーターを着てか

ら玄関を開けると門の影に隠れるように立っていた佐々木がササツと玄関に飛び込んできた。どうした、佐々木、何時に無く拳動不審だな。

それより、いったいどうしたんだ、見ての通り、俺、風邪というかインフルエンザで寝てたんだ。さっきのは、そのだな、寝汗をかいてシャワーしてたら呼び鈴が鳴って、まさか佐々木だとは思わないうで玄関を開けちまったんだ。決してあんな服を着る趣味があるわけじゃない、頼む、誤解しないでくれ。

「分かってるさ、僕だって君にその様な趣味が有ろうはずが無い事は承知している。」

だが君のドジな所は以前より酷くなってる様だな。

僕は君がインフルエンザで倒れていると聞いたから見舞いに来たんだ」

そう言つて佐々木は後ろ手に隠し持っていた花かごを渡してくれた。

すまん、なんだかもっと重病然としてないと悪いみたいだな、だが、俺が寝込んでるって誰から聞いたんだ？

「クツクツク、君は推理するという思考方法を放棄しているようだね、国木田君だよ。」

彼と僕の模擬試験の会場が偶然にの一緒だったんだ。

そこで君が病気だつて事を聞いてね。

親友が寝込んでいると聞けば見舞いに来ない訳にはいかないだろう？」

佐々木は思いも寄らない事をいつてにこりとした。

玄関先で立ち話をしていとお袋と妹が連れ立って丁度帰つて来た。

佐々木は玄関先で挨拶して帰るつもりだったらしいが久しぶりに会ったお袋に背中を押されて強制的に上がらされて俺の部屋に二人で押し込められる様な有様になった。俺がハルヒからもらつて少々くたびれたマスクをしているのに気づいた佐々木はバッグから真新

しいマスクの袋を取り出し俺に渡してくれた。
リップクリーム付きに少々恥ずかしい思いをしていた俺は有難く
頂くことにする。

お袋が運んできた生姜湯をを飲みながら生姜湯の蘊蓄を聞かせて
くれた佐々木は時計を確認するとお袋と妹に挨拶しながら帰って行
った。どうせ塾かなにかが控えているのに無理をして見舞いに来て
くれたのだろう。

俺も少し冷めた生姜湯を飲み干し、佐々木がくれたマスクをする
と再び布団に潜り込んだ。

俺はいつの間にか眠り込んでいたんだろう、きっとそのままゆっ
くりと眠っていたらインフルエンザだって完治していたに違いない。
だが俺の神様はそれを許しちゃくれなかった。バシンと顔と鼻にシ
ョックを感じて目を覚ます、いったい何が起こったんだ？

「ちょっとキヨンのマスクを引っ張ってみただけよ」
は？ ハルヒ、いつの間どこから湧き出たんだ？

「人を温泉か妖怪みたいに言うんじゃないの、ちゃんと玄関を妹ち
やんに開けて貰って入ってきたわよ。」

団長自ら様子を見に来たんだからもう少し感激しなさいよね」
そう言いながらハルヒはさかんに文字通り鼻をひくひくさせなが
ら部屋をかぎ回っている。

どうした、ハルヒ、鼻の具合でも悪いのか、俺の風邪がうつつち
やったのか？

「そんなわけ無いじゃない、どう、熱は下がった？」

ハルヒはそう言いながら冷たい人差し指の先で俺の額をトンと突
いた。

イダ、痛いぞ？

「ふん、まだ一丁前に熱が有るみたいね、大人しく寝ないで不埒な
真似をしてるからよ、一辺死になさいよね。」

良いこと、絶対クリパまでは外出禁止、面会謝絶、絶対安静で治しなさい。

じゃ、帰る」

ハルヒ、見舞い、有り難う、ちゃんとうがいとかしてくれよな。

ハルヒはジトつと俺を睨むとパタンと扉を閉めて出て行ってしまった。

どうやら俺を脅しつけて満足でもしたのか？

それともお袋達が居て俺を玩具に看病ごっこが出来ないと思ってさっさと帰ったのか？

再び襲ってきた激烈な寒さにベッドに置いてあった体温計を脇に挟んで横になる。この熱はハルヒの呪いじゃあるまいな。やがてピピツと音がした体温計の表示は39.4。ヤバ、死ぬ……

第一章 トナカイの季節 12月22日

今日は朝から猛烈に喉が痛い、咳も出る、痰も出る。本気でヤバイのかもしれない。思い直して朝飯前に不味い漢方薬を飲んでみることにする。どうあがいても終業式にはでられそうにない。

俺は頃合いをみはからって学校へ電話を入れ担任の岡部を呼び出して貰う。

「お、インフルエンザで休むんだろ、聞いてるぞ。

ハツハツハ、成績表はちゃんと涼宮に預けるから心配するな。

じゃ、会議があるから、ちゃんと治すんだぞ」

何処でどう話通じているのか一方的にそれだけ話すと電話が切られてしまった。

え？ 待て、何故にハルヒ？

古泉の奴、全く信じられないことをするな、クリパで会ったらとちめてやらなくてはならん。

俺は携帯を机の上に放り出すと再び布団に潜り込んだ。

十時頃お袋が再び生姜湯と切ったリンゴを持ってきてくれて目が覚めると俺は生姜湯を啜りながらハルヒにメールを入れておく。

『岡部がハルヒに俺の成績表を渡すと思う、

頼む、絶対中身を見ないでおいでくれ。

まだ喉とか痛いけど、クリパには絶対治して行くからな』

ハルヒが俺の頼みを聞いてくれることを祈りながら送信ボタンを押し、携帯を閉じる。

古泉のやつ、忌々しい、忌々しい、ああ、忌々しい。

お袋と一緒に部屋に入ってきていたシャミは俺の枕の上を陣取り動く気配がないので生姜湯を飲み終えた俺は仕方なく枕無しで布団の中で丸くなることにした。

どうも病状は一進一退、熱がなかなかすつきりと下がらない。

夕方に代引きの宅配便が届いてお袋にとっちめられるが、ちゃん

と後で払うと言ってなんとか納得させる。俺は漢方薬とお袋の生姜湯を頼りにその日をずっとつとつとしながら過ごした。

第一章 トナカイの季節 12月23日

朝起きたときは一瞬良くなったのかと思ったが台所まで歩いて行くのにどうも足元がふらつく。いつもは五月蠅くまとわりつく妹もさすがに心配になったのか部屋を覗いては氷枕を当てたり、額にぬれタオルを置いてくれたりしている。この調子じゃ明日のクリパは無理だろうか？

午後になり再び熱が上がってきて身の置き場も無くなってきた。妙に天井が高く見えたり、トイレに行こうと歩いても体がふらつく、吐き気までするし頭はガンガンに痛む、首根っこもガチガチに凝って首が回りにくいほどだ。ベッドの縁に座り込んでいると携帯が鳴った。誰からの電話か確かめもせず携帯を開く。その声は、古泉か、何やら必死にハルヒがどうのこうのとかが橘がなにやらとか意味不明な事をいつている、世界が？おう、世界は回ってるぞ、ぐるぐるだ、訳分らない話は俺のインフルエンザが治ってからにしてくれ、マジで死にそうなんだ。

やがて古泉は諦めたのか、万事休すとかイミフな事を言って電話が切れた。

しまった、岡部に変な手回しをした事も文句を言うのを忘れた。

ああ、頭痛い。いつの間にか今日もシャミが俺の枕を占拠している。ダメだ、シャミ、やっぱり枕を返してくれ。

俺はそのまま夕方まで意識を失うこととなった。

熱で俺の知性と理性は完全に吹き飛んでいたに違いない、でなければあんな夢なんぞ見るわけが無いし目覚めてからもあんな事を口走るはずはない。

夢の中で俺はあのおぞましい閉鎖空間で嬉々として走りまわって俺から逃げようとするハルヒの名前を懸命に呼んで追いかけていた。早くハルヒにキスをしないと世界がもう崩壊しようとしているのが

常人の俺にすらはつきりと分かる。俺は走ったあげく息が切れ死にそうに胸が苦しい、足が萎えてもう倒れそうだ、ハルヒは俺をからかうように振り向くとアツカンベーをしてみせる、ハルヒ、戻ってきてくれ、ハルヒ……………

俺がついに仰向けに倒れた時ハルヒが俺頭元へ来ると俺の両頬をひんやりとした両の手で挟み艶やかな唇で俺の唇にそつと触れた。

「キヨン、もう大丈夫よ。

私がいるから」

俺はほつと安心し夢の中で意識を失った。

額に冷たい物がべつたつと乗った感覚で意識が戻る、妹か？

薄暗い部屋で誰かが俺を覗き込んでいる。誰だ？ ハルヒ？

まさかな、でも、ハルヒだったら嬉しいかな。

「キヨン、私よ。

気が付いた？」

あれ、ハルヒの声が聞こえる、本当にハルヒが俺を助けに来てくれたのか？

「キヨン、しつかりして。

凄く熱なんだから、こんなので死んだら駄目よ」

ハルヒ、ちよつと黙って俺の手を握つてくれ、安心するから、俺眠いんだ。

朦朧とした俺はそうとんでもない事を口にして再び眠りに就いた、らしい。

再び俺が意識を取り戻したのは真つ暗な部屋にお袋が入ってきた物音によってであった。

「ハルヒちゃん、明かり点けようか？」

「いえ、おば様、キヨンが寝てるから。

大丈夫です」

ハルヒは俺が眠っている間ずっと俺の手を握っていてくれた様だ。

ハルヒ、目が覚めた。明かり点けてくれて良いぞ、大丈夫、大分すつきりしたし頭も痛くない。

「キヨン、本当？」

ハルヒの手が俺の首元に触れる。

「あ、凄い汗、でも、熱下がったみたい。

良かった」

お袋、のどか乾いた、肌着の替えと飲み物くれないか？

あれ程痛かった頭も、体も嘘の様に軽い。吐き気もまったく無い、むしろ猛烈に腹が減って喉も渴いている。ハルヒがお袋と一緒にお茶を淹れて来ると言って部屋から出た間にベッドから出て大急ぎで体を拭いて肌着を着替える。強張っていた体を伸ばしてストレッチをしているとハルヒが盆に苺が載ったケーキと紅茶を持って部屋に入ってきた。

「キヨン、そんなに動いて大丈夫なの？

私 came 来たときはいくら呼んでも返事しないから死んじゃうかと思つて心配したんだから。

これ、有希ちゃんとかなたからの差し入れよ、私に持っていつてくれた」

そうか、済まない。クリパ、いよいよ明日だな、準備は大丈夫か？

「そんな事心配しなくていいから、

具合が悪かったら明日休んでも怒らない。

皆にはちゃんとやっておくから」

駄目だ、絶対行くから。

「誰か会いたい人でも居るの？

元気出たみたいだから、私、帰る。

良いこと、治ってないのに出てきたら死刑よ」

玄関まで送ろうとする俺を無理やり押しとどめてハルヒは玄関でお袋と何やら言葉を交わして帰っていった。

ハルヒが運んで来てくれたケーキは特大の苺が二つも乗った見た

こともない豪華なショートケーキ、こんな凄いショートケーキは初めてだ。紅茶を嚙ってケーキに取りかかる、何だ、この尋常でない旨さは？ スポンジの間に何層にも渡って苺と生クリームの層が重ねられ、スポンジはしつとりと柔らかく良い香りがしている。苺も只甘いだけじゃないしつかりとした苺の風味と瑞々しい果汁、生クリームに負けない甘さ、そして特筆すべきは芳醇な香り。こんなに美味しい苺は初めてだし、しかもこんなに苺をふんだんに使ったショートケーキも生まれて初めてだ。気がつく俺は皿とフォークを舐めようとしていた。

その時、左腕の時計がビビビビと震える。かなたからだ。

KANATA・M< キョン先輩、具合はどうですか？

かなた、凄く元気になった。今、ハルヒに言付けてくれてたケーキを食べたところだ、こんなに美味しいショートケーキは生まれて初めてだ、ありがとう。一体どうしたんだ？

KANATA・M< 良かった、気に入って頂けましたか？

KANATA・M< 明日の試作品ですけど、喜んでいただけて作った甲斐があります

KANATA・M< 苺は私と有希姉さまで一つずつ乗せたんです
そうか、それで二つも乗っていたのか。凄く美味しかった。

KANATA・M< 先輩の体のパラメータは殆ど正常化しましたけど、明日の昼までは休んで下さいね

ああ、ハルヒにもそう言われた。準備の方は大丈夫か？

KANATA・M< 谷口先輩は来れないって言われてるんです

KANATA・M< 谷口先輩にもう一度頼んでみて下さいね

ああ、国木田と谷口に後でメールをしておく。

KANATA・M< お願いします、後、有希ねえさまから伝言です
KANATA・M< 『良かった、涼宮ハルヒ感謝を』 ですって

長門とかなたにも心配かけた、済まない、そして、ありがとう。
長門に伝えておいてくれ。

KANATA・M< はい、確かに。では、お休みなさい

ああ、おやすみ。二人とも、また、明日

俺はその夜、久々に晩飯をしっかりと食い、止められるのも聞かずにゆっくりと風呂にも入った。本当に生き返った様だ、むしろいつもより具合が良いとさえ感じる。

届いていた長門と妹へのプレゼントの包みを宅配便の段ボールから取り出す。しっかりクリスマス用の包装紙にラッピングしてくれている、これは助かる。ハルヒへのプレゼントを入れた紙袋に一緒に入れると妹に見えないように上から体操着を被せて隠すと湯冷めをしないうちに布団に潜り込むことにした。

第一章 トナカイの季節 12月24日

久しぶりに心地よい目覚めを味わった。シャミにも妹にも邪魔されずに自然に目が覚めるといふのは頗る気持ちが良い物だ。俺は布団から這い出すと全身のストレッチを一通り済ませ、着替えて居間へと降りて行つた。

「キヨン君、おはよう。」

「具合は、大丈夫？」

大丈夫だ、すっかり治つた気がする。ボディーアタックを受けずに目覚めるのがこんなに気持ちが良いのかと感激していたところだ。「もう、いつも目が覚めるのが遅くて遅刻しそうだから仕方なくおこしてるのに。」

「そんな事言つたらもう起こしてあげないモン」

妹の言い分を全否定するわけじゃないが、それだけ毎日の勉強が大変だと言うことだ。

「それだけ口が達者になつたんならもう大丈夫そうだね。」

昨日はいくら呼んでも目を覚まさないからいつそ救急車でも呼ぼうかと相談してたんだよ」

「ハルにゃんちゃんのカーキ、美味しかったよね」

あれは長門とかなたが作つて言付けてくれたらしい。お袋達にもあつたのか、美味かつたろ？」

「苺が二つ乗つたのはキヨン君のだって、ハルヒちゃんが言つてたから一つずつ乗つたのは私達で頂きました」

なんでもあの苺は長門とかなたが一個ずつ乗せたらしい。今日会つたら礼を言わなくちゃならないな。

「キヨン君、本当に行くの、大丈夫？」

俺が行かないとプレゼントの交換が成立しないんだ、アイディア出したのは俺だから絶対抜けるわけには行かないんだ。

「そんなの心配だよ」

「今日夕方まで様子をみて、熱とか症状が出なければ考えても良いけど、無理は止めなさいよ。」

ハルヒちゃんだつてあんなに心配して来てくれてたんでしょ。」

あ、そういえば二学期の成績表あいつが持つてるんだつた。

「昨日、終業式で配られたプリントなんかと一緒に預かってます」
み、見たのか？

「キヨン君にも私の見せたげようか。」

みよきちがいいなって言ってたんだよ。」

お前まで見たのか、俺ですらまだ見てないのに。

「ハルヒちゃんがね、クリスマスが済んでからキヨン君に見せてつて言つてたからそうしてあげるわ。」

心置きなく楽しめるように、せめてものプレゼントなんですつて」
おい、そりゃ反対だろ、今年は懸案事項もなく安心してクリスマスパーティーが迎えられる予定だったのに。

「キヨン君には今年はやちゃんとサンタさんがいるから大丈夫だよ、さ、キヨン君もご飯食べよう。」

私たち、もう食べちゃったよ。」

俺はお袋と妹にからかわれながら朝飯を済ませるとシャワーで汗を流して頭を洗い、少々伸びていた無精髭をさっぱりと当って部屋に戻る。妹のあの口ぶりだと、やっぱり俺からもクリスマスプレゼントを期待しているんだろつな。実は長門の手袋を注文した時に指の一本一本に猫の顔がデザインされた手袋を見つけて妹にはそれを一緒に注文してあつたんだ。妹用の包みを残し、後の二つを外出用のバッグに詰める。ハルヒも長門も喜んでくれるだろうか？

心配かけてるからハルヒには電話をしておこうと携帯に手をのばした瞬間携帯がけたたましく吠える、ハルヒからだ。

ハルヒ、お早う。

『うっ、取るの早かつたわね。どう、具合は』

ちょうどハルヒに電話しようとしてた所だった。おかげで凄く元

気になった、もう大丈夫だ。

『熱や、咳とかは？』

熱はハルヒが帰ってからすっかり下がったし、咳も痰も昨日の夜ですっかり治った。

『頭とか腰とか痛かったのも良いの？』

不思議なくらいなんともない。

『じゃ、残念だけど病人卒業ね。』

でも今日は夕方までちゃんと静養してなさい、

クリパの会場に来てまで湿気た顔してたら承知しないわよ。

準備をサボった分、本番ではトナカイ被って働いて貰うから』

おいおい、お手柔らかに頼むぞ。

『それとプレゼント交換が成立しないから絶対来なさいって谷口のアホに連絡しておいて。』

あいつアホっぽい絶対振られるって思うのよ』

ああ、ハルヒがそう言ってたって伝えておく。というか、ハルヒがそう言った時点で確定だなと思うのは古泉の思考に毒された結果なのか？

『ちゃんと言った事は自分で責任取りなさいよ。』

じゃ、今から用意にかかるから、

今日は本気で期待しなさい』

昨日の長門とかなたのケーキも凄く旨かったから今年は去年にも増して食い物には期待できそうだ、だが今年もトナカイって、またアレで記念写真とるのかよ。

気を取り直し谷口には一応絶対来るようにとのメールを入れる。

『キヨンよ、残念だったな』

超可愛い娘だぜ』

今夜はツーショットのシャメ送ってやるから待つてな』

あり得ない、と言って今更プレゼント交換成立の為に別人を誘う当ても無い。最悪妹を代わりに仕立てるか。

だが、妹が谷口向けのプレゼントを喜ぶとは思えないな。
何としたものか……

昼過ぎになると妹がドタドタドタと俺の部屋にやってきた。どうした？

「キヨン君、どお？」

どお、って、何がだ？

「私を見てどおってきいてるの」

何時も通り学年のわりにはすべてにおいて成長が遅い癖に口だけは達者な何時も通りの妹に見えるが、何か違いがあるのか？

「ハルにゃんが一辺殺すって言ってた理由がよく分かるわ。」

だから、見てよ、ほら、髪留め」

なるほど、確かに薄いピンクのフワフワの大きめなほんぼりが二つ付いた髪留めで髪の毛を括っている。

良いんじゃないか、クリスマスっぽくて似合ってるぞ。

「にはあ、ミヨキチのお勧めだったんだ。」

良いでしょ、可愛いでしょ、似合ってる？」

そういうとジングラベル、ジングリベルとか意味不明な鼻歌を歌いながらドタドタと戻っていった。いったい何をしに来たのやら。

十分ばかりするとまたドタドタと俺の部屋にやってくる。今度は分かったぞ。

そんな服、どうしたんだよ。

「可愛いっしょ、白サンタだよ」

朝比奈さんが着ればマイクロミニに為りそうなサイズだが妹が着るとすっかり膝までの長さがある。

もつともあの方の場合は胸回りがとても入らないだろうが。

「またキヨン君、変な妄想とかしてるんじゃない？」

口元がデレーっとして涎が出てるよ」

最近は小学生のクリパでもコスプレするのか？

「何、こすぶれって、美味しいの？」

おい、今の発言、微妙なんだが。

「これね、昨日ハルにゃんちゃんを持って来てくれたの、

みくるちゃんに着せようと思ったたらサイズが合わなかったって」

何だ、俺の発想と代わらないじゃないか。

「ね、似合ってる、可愛い？」

ああ、似合ってる似合ってる、可愛い可愛い。

「ゼンゼン気持ちがおもってないよお。

良いモン、これにしよつと」

四時過ぎ、そろそろ出かけようと用意をしていると古泉からメールが来た。

『病み上がりと存じますので車を手配させて頂きました、

ご一緒にいらして下さい』

古泉にしては気が利きすぎだが、用意してくれるなら利用させて貰うのに吝かではない。

着替えて玄関に降りると妹がコートを着て待っている、何故に、

お前も出かけるのか？

「うん、付き添い」

何だって？

「キョンくん、まだ心配だから私が付き添うの。

お母さんもハルにゃんちゃんもそうしなさいって」

で、その横にある見るからに怪しい籠は何だ？

「ミヤア」

呼ばれてシャミが籠の中から返事をする。

「ハルにゃんちゃんがシャミも招待するから連れておいでって」

俺の知らない間に色々な外堀が埋められてる気がするが、すると大阪城って何なんだ？

やがて到着した見知った運転手の運転する黒塗りのタクシーで俺達と一匹は北高を目指し出発した。

それからの事は実際に体験しないと言葉では如何とも説明しがたい。

それぞれのケーキやお菓子、阪中さんのお母さんが焼いてくれたという小さなシュークリーム、ハルヒが鍋奉行を務めた鍋、長門が購入してハルヒと一緒に焼いたという七面鳥、長門が作ってくれた温野菜のサラダとシチュー、どれをとってももの凄く旨かったし、量も十分あった。

何時ものハイテンションのノリで場を盛り上げてくれる鶴屋さん、結局出来たばかりの彼女に振られた谷口も国木田に引つ張られてやってきたし、森さんも実に楽しそうにしていた。ハルヒももちろん、何時もの1.5倍増しのハシヤギ様だし、黒執事とかいう執事のコスプレをした古泉に至っては似合いすぎて思わず全国執事協会とがあるなら折り紙付きで推薦したくなるような様だった。

そういえば森さんも気に入ったのか随分褒めていたな。機関とやらであれが古泉の制服にならない事を祈っておいてやろう。

朝比奈さんは結局新調のメイド服で遺憾なくドジツ娘ぶりを発揮してハルヒに褒められていたが、何となくその合間に一瞬みせる寂しげな表情は何だったんだろう？

PCのモニターには去年と今年の文化祭で披露された超問題作や、その予告編やら何やらのつきはぎで一応完成した朝比奈さんのSFファンタジー調プロモーション映像とかが流れていたし、俺はといえばお約束のトナカイのかぶり物だが、今年はかなたもトナカイを被って俺に付き合ってくれた。

お前、女の子なのにこんな変なかぶり物で良いのか？

「だって、これ、一番目立つでしょ。」

キヨン先輩だけ目立ってズルイです。

私もキヨン先輩とお揃いがいいんです」

「キヨン、今年もトナカイ似合ってるわよ。」

二人もいるんだから、来年は襦袢を用意しなくっちゃね。

ほら、キヨン、そこに四つん這い」

また訳分からん事をいうな、ハルヒ、何がって、おい、俺の背中に乗るのかよ。

「ね、みくるちゃん、写真撮って」

「あ、私も乗りたいです、二人乗りしません？」

ハルヒも朝比奈さんも、それに阪中さんや鶴屋さんも加わって、俺をアトラクションの着ぐるみ扱いだ。

着ぐるみと言えば、長門が、誰かに貰ったプレゼントなのだろうか、柄にもなく北高の制服を着た人形をバッグに入れてたのが見えた。

何となく朝倉に似たその人形が一瞬、俺をちらつと見たような気がしてドキツとしたが、あれは気のせいだよな？

漸くアトラクションの着ぐるみの役を解放されぐったりしている
と例の執事化した古泉が俺に声をかけてきた。

「お疲れ様です。あまり汗をかくと帰宅する時に夜風で体温を奪われますよ」

んな事は病み上がりをこき使う諸悪の根源、ハルヒに言ってるやってくれ。ひよつとして古泉は皆に乗られた俺が羨ましかったのか？

まったく好き好んで俺がこんな事をしていてると思ってるのか……
「それだけ汗をかいているという事は体内の水分が消費されていま

すから、これを飲んで水分補給して下さい。常温の物ですが。」

古泉が差し出してくれたグラスにはたっぷりの水が注がれていた。ぐつと飲み干す。飲んだ水は汗をかいて干からびたようになって悲鳴を上げていた俺の体にすつと馴染んで吸収されていくのがわかる。なるほど、気が利くじゃないか。今ちようど朝比奈さんにお茶を頼もうと思ってたのに良く分かったな？

「フロントムハイヴ家……いえ、SOS団の執事たる者この程度の事

が出来なくてどうします?」

こいつ、マジで執事に成りきってるのか。こいつにこんなコスプレ魂があったとは以外だったな。SOS団以外でなら執事の方にも需要があるかもしれないがSOS団にはれっきとした専属ドジッ娘メイドたる朝比奈さんがおられるから執事なんぞに出番はない、だいたい執事化した古泉がいる部屋ってのは気持ち悪くてやってられないぞ。

「では、僕はこの辺りで失礼します。もうすぐプレゼント交換の時間になると思いますので」

俺の考えに気づいたのか古泉は一瞬にやりとすると慇懃な礼をしてテーブルの方へと歩み去って行った。

古泉、その格好はクリパ限定だからな。

午後七時から始まったプレゼント交換で、俺が長門に渡した白いフワフワのロングファーのミトンは思った通りメチャクチャ合ってたし、長門も皆に褒められて嬉しそう……だったのだと思う。

人前ではいつも以上にデフォの無表情なのが長門の表情鑑定士一級の俺が言うのだから間違いない。

国木田は俺にシステム手帳かビジネス手帳だかって言うのをくられた。

其れをみたハルヒは俺から手帳を取り上げる、いったい何がしたいんだ?

「私も国木田と同意見よ、キョンの為にみっちり予定を書き込んで置いてあげる」

どうして俺のスケジュールをハルヒが書き込むんだ?

「ねえ、みくるちゃん、団活の判子って無かったかしら」

そんな物何処の世界にだって有るわけ無いぞ。

「365回も団活って書くの面倒だわ、

どっかに判子落ちてないかしら」

「これ」

何だ、長門？

「判子、団活の判」

そんな物があったのか？

「今、構成した」

どうして、いったい？

「お礼、気にしなくていい」

谷口は薔薇の花束を森さんにプレゼントしてヤンヤの喝采を浴びていた。大人の女性である森さんにあんな女の子らしいプレゼントをするなんぞ、俺にはとても出来ないが意外と本人も照れながら喜んでおられる。

パーティーが終わり、片付けに残った団員を除いて三々五々と散会になり、ちゃっかりとプレゼントを貰った上にSOS団ジュニア部なる珍妙な腕章をハルヒに着けさせられ浮かれていた妹もシャミを連れて古泉の手配してくれた車で帰って行き、俺のクリスマスアイブは懸案一つを残すのみとなった。

その事については、また、筆を改めて。

あ、忘れていた。家に帰って妹にやった指全部が一匹ずつの猫になっっている手袋は家族には大好評だった、ただ、妹はジトツと俺を睨むと小声で

「私もゆきちゃんみたいなオシャレなのがよかったかな、覚えててよね」

そう囁いた。お前が大人っぽいのしたってだな……

その瞬間ガシツと俺の足を踏むとばいっと綺麗にラッピングされた小さな箱を俺に放り投げて自分の部屋へと行ってしまった。

何だ、こ箱は？

「プレゼント、ミヨちゃんからの。」

渡したからね」

何故俺がミヨキチからプレゼントされる？

「あら、キヨン君、ちゃんとお返ししなさいよ。」

あの子、まだまだ美人になるわよ」

お袋、言ってる意味分らないし。

それと、成績表と、ハルヒとの約束と……

俺の年末は、まだ忙しい日が続きそうなの……

そう、これが俺の今年のトナカイの季節。

第二章 White Christmas（ホワイトクリスマス）

それは不思議な目覚めだった。

「キヨン、約束よ」

その言葉だけが耳に残っていた。そして意識は白熱電灯のスイッチが入ったかのようにその瞬間から明晰だった。そして心は暖かい幸せな雰囲気覆われていた。

起き上がった俺は気がついた。何時もの朝と何かが違う、そう、とてつもなく静かなのだ。

凜として冷たい空気の中、立ち上がってカーテンを開ける。

曇ったガラスの向こうはやけに明るい光に満ちている。

触れただけで痛いほど冷たいサツシのロックを外し窓を開け放った。

そこは光あふれる白銀の世界。ホワイトクリスマスだ。

大きく息を吸い込む。冷たく心地よい大気が鼻腔を、気道を、肺を満たしていく。

ハーツと吐き出した息は白い雲を形作り、次の瞬間、融けるように消えていく。

だが、俺の耳に残ったあの言葉は消える事はない。あれは何の約束だったんだ？

ブルツと身震いすると窓を閉め俺は階下へと向かった。

朝食を済ませると昨日渡しそびれた包みをバッグに入れ、俺は部屋へと向かう。インフルエンザで寝込んでいたせいでクリスマスパーティーの準備にまったく参加しなかった罰として部室の片付けを午前中に済ませるよう昨夜帰りがけにハルヒに厳命されたからだ。

出かける頃にはうつつすらと積もっていた雪もほぼ融け、自転車ですら十分走れる状態だ。自転車の籠にバッグを放り込み冷たい風の中自転車を北高へ向かい走らせる。駐輪場に自転車を置き殆ど足跡の

着いていない道を独り歩いて登り切ると真っ直ぐ部室へ向かう。一つ大きなため息をついて悴んだ手で部室の扉を開け、一步部室へと踏み込んだ。

「遅い、キヨン」

は、ハルヒ？

「そうよ、ちゃんとキヨンが働くか監督に来てあげたんだから。」

ほら、どうせ寒いんでしょ、お茶はいつてるわよ」

お、おう。済まん。

ハルヒの居る窓際の机に置いてある俺の湯飲みはたしかに暖かそうに湯気を上げている。

悴んだ手を湯飲みで温めながらゆっくりとお茶を飲む。

「どう？」

うん、暖かくて生き返るみたいだ。サンキユな。

「私がキヨンにいれてあげたんだから、心して飲みなさいよね」

もちろんだ。そう言いながら俺はバッグから包みを取り出し、意を決してそれをハルヒに差し出した。

メリークリスマス、ハルヒ。

本当は昨日渡したかったんだ、遅くなつてすまん、俺からのプレゼントだ。受け取ってくれ。

「あ、ありがとう。」

キヨン、ちょっと待ちなさい、いまキヨンにもあげるから」

ハルヒはそう言うとコートの中に隠し持っていた紙包みを俺に差し出した。

「家にあつたので包んだから上手に包めてない、ごめん」

開けて、良いか？

「良いけど、笑ったら殺すわよ。」

私も、開ける、良い？」

ああ、勿論だ。

ハルヒに渡された袋のテープを外すと中から毛糸で出来た物が出てきた、長い、ひよっとしてマフラー。自分で包んだって、まさか

ハルヒの手編み？

「その、まさかよ。」

「どうかしら？」

太めの色変わりの毛糸で編まれたマフラーを首に巻き付けてみる。
暖かい。

ハルヒも包装紙をはいで中から出てきた箱の蓋を取る。

「ファー？ ひよっとして本物？」

ああ、スカンジナビアの狐さんだそうだ。

「柔らかくて綺麗な色。」

うん、暖かい

「どお、似合う？」

思った通りだ、そのコートによく合う、似合ってる。

「えへ、ありがとう、もう、貰ったからね、返せって言っても返さないわよ」

俺だつて返さない、それよか、ハルヒ、ちょっと外に出てみないか？

「何、どれぐらい暖かいか確かめる？」

そ、そうだ、確かめさせてくれ、さ、行くぞ。

外靴に履き替えると俺はハルヒの手を引いて校庭に出た。雪の上には誰の足跡も無い。

何処だっけ、そう、このあたり。

俺は振り向くと息を弾ませてついできたハルヒの両肩に手をおいた。

「ハルヒ、一度しか言わない、聞いてくれるか」

「な、何よ、キヨン、改まって」

「ハルヒ、俺と付き合ってくれ」

虚をつかれ一瞬きよとんとしたハルヒはふにっとなぐらした。

「い、良いわよ、びっくりした」

「ハルヒ、お前が……」

それから先を俺は口に出すことが出来なかった。

なぜならハルヒが俺の具備に巻いたマフラーをぐいっと引っ張って俺を引き寄せると強烈なキスをしたからだ。

「キヨン、知ってた？」

私、キヨンが好き。

だからずっと私の側にいて。

キヨン、約束よ」

この場所でハルヒにキスをして一年半、再びこの場所でキスをして、そしてハルヒは俺の彼女になった。

もう一度言おう、ハルヒ、メリークリスマス、俺はハルヒが好きだ。そして、頼む、マフラーゆるめてくれ、息が、息が、苦しい……

第三章 新しい日常

借りてきていたテーブルと椅子を日直の先生に頼んで開けて貰った倉庫に返し、隣の空き部屋に押し込んであった朝比奈さんの着替えなんその衣装のぶら下がったハンガーラックや、いつそのまま粗大ゴミに出すべきではないかと思える品々が詰め込まれた段ボール箱を運び込み、机の配置を戻し、ハルヒの机のパソコンの配線をやリ直し、最後に部屋の雑巾がけを済ませて一息ついた頃、部屋にバッグを置いたまた飛び出していていたハルヒが戻ってきた、というより部屋のドアにハルヒが頭突きをしたらしい音がしてハルヒの声がしたのだ。

「ちよつと、キヨン、開けなさいよ」

何事だ？

俺が部屋の扉をあけると両手に紙袋を持ったハルヒが不機嫌そうに立っている。

おう、お帰り、寒かったか？

「そりゃこんな雪の日に外歩いてきたんだから寒いわよ。

それより、キヨン、私歩きながら色々考えた。

で、決めたの、よく聞きなさい。

私はSOS団の団長、キヨンはヒラ。

団の中では、その、あの、私がキヨンと、えつと、何よ、イ……チャ……とか、してたらさ、示しが付かないでしょ。

だから、その、えつと……」

どうやら不機嫌な顔は照れ隠しだったらしい、いきなり真っ赤になってモジモジしだしたハルヒをもう少し堪能していたい気もしたが俺が助け船を出してやることにした。

「分かってる、団の中では今まで通りで頼む。

変に気にしないでくれ、皆の前で別に俺とハルヒがつきあい始めたって言うって変に気を遣わせたくない。良いか、ハルヒ？」

「と、当然よ。分かってるならいいわ。だけど……」

「団活が休みの時は、その、俺と過ごす時間を作ってくれると嬉しい、かな？」

ハルヒはこくりと頷いて俺に紙袋を手渡した、これは？

「頑張ってくれたからお昼ご飯、ハンバーガー買ってきたの、冬限定のお汁粉。」

キョンちよつとお湯わかして、そうしたら食べ終わった頃にコーヒ―淹れたげる」

ハルヒが買ってきてくれたのはオーソドックスなパテ、トマト、レタス、チーズのハンバーガー二つ、海老カツバーガー、タコスのトルティーヤそれぞれ一つ、ちよつと変わった餅が入ったお汁粉二つ。趣旨が分からん。俺ならホットチキンは外さないところだが。

「我が儘言わない、私が食べたかったんだから良いですよ。」

それに鶏なら昨日さんざん食べたでしょ。

ハンバーガーとお汁粉は一つずつ、あとは半分こして食べるの」

いいな、なんか、その、彼女と一緒に食べるみたいで……

「バ、馬鹿キョン」

え、どうやって分けて食べたかった？

そりゃ、そのだな、適当に交代で囓ったわけだ、その、トルティーヤを両側から食べていって真ん中で、その、何するなんぞベタな事は決してしないぞ、なにしろ此処は神聖な部屋だからな。

俺たちが食事を終え、口の周りについたピリ辛のタコスのソースをティッシュで拭き取ってハルヒが入れてくれたコーヒ―で寛いでいるとドアがノックされた。

誰だ、空いてるぞ、朝比奈さんも着替えていない。

「お邪魔かと存じますが約束の集合時間ですので参りました」

そういつて古泉が入ってくる。続いて朝比奈さん、長門、かなた、四人揃って入ってくるなんぞ珍しいな。

「定刻、当然」

確かにハルヒが昨日帰り際に集合時刻と言っていた午後一時ジャストにだが、俺としては古泉達が扉の向こうで俺たちの様子を伺いながら定刻を待っていた様な気がするが。

「キヨン君、男の子は細かいこと気にしちゃ駄目ですよ」

「今日のおやつはお節用の栗きんとんです、お正月と一緒に出来ないで気が早いですけどもつてきちゃいました」

「え、かなたちちゃん、どこかに行くの？」

「はい、涼宮先輩、申し訳ないですけどお正月にかけてちょっと故郷の方に帰ってこなくちゃいけないんです。お墓の事とか、いろいろあつて」

「あ、そうか、そうよね、一周忌になるのね。分かったわ、行つてらっしゃい、気をつけてちゃんと帰ってくるのよ」

「はい、ありがとうございます」

「じゃ、有希も一緒なのかしら？」

「私は残る」

「良かった、二人も居なくなったら寂しいものね」

古泉君、今年の冬、また何か計画してるの？」

「申し訳ない、今年は朝比奈さんも鶴屋さんも受験でお忙しいですし、陸奥さんまで参加出来ないとなると大きなイベントは差し控えたいと考えています」

「それもそうかもしれないわね」

オンとオフのメリハリも大事よね、じゃ今年は大晦日の蕎麦大会までフリーにするわ。

蕎麦大会が済んだら初詣、みくるちゃんもそれぐらいなら参加出来るでしょ」

「あ、はい、大丈夫です」

でも、蕎麦大会つて、何処でやるんでしょう？」

「ふっふっふ、任せなさい、私に積もりがあるから」

じゃ、今日は今年最後のミーティング、大反省会をするわよ。

みくるちゃん、書記、よろしく」

「は、はい、わかりましたあ」

結局反省会というより今年度の出来事を羅列しつつハルヒの思いつきの歴史を時系列で辿っただけだった様な気もしたが、かなたの持って来た栗きんとんをお茶請けに朝比奈さんの淹れてくださったほうじ茶をふうふうとしながら四方山話の後すんなりと解散となった。

朝比奈さんにじゃれつきながら北高から下るハルヒに再び降り始めた雪で足元に滑りやすい所があるから気をつけさせなければと声をかけようかと思案しているとかなたが俺の横にヒョイとやってきた。

どうした、かなた？

「あのですね、さつきもお話したんですけど、地球の生命圏の調査であちこち出かけてこようと思います。ですから、何かあったら時計で連絡してくださいね」

故郷へ情報を送るための調査なんだろう、まとまった休みがなかなか取れなかったから仕方ないな。かなたの事だから心配は無いと思うけど、気をつけてな。

「はい、大丈夫だと思いますけど、涼宮先輩と喧嘩しないで下さいね」

かなたには隠し事は出来ない、今朝の事もちゃんと分かっているんだから忠告は有り難く受け取っておく。ハルヒも以前より丸くなってきたから大丈夫だ。

俺の返事を聞くとかなたは嬉しそうにびよこびよここと頭を振りながら飛び跳ねるように長門の隣へ走っていった。

俺の後ろではきつと古泉が俺に話しかけたそうにニタニタしているに違いないが、古泉、残念だったな、俺はハルヒが転ぶ前にハルヒの所へ行つて声をかける事にする。何のために？ 決まってるだろ、この後ハルヒをどこかに誘うためさ、とりあえずは本屋にでも誘ってみよう。

多分ハルヒは満面の笑みで俺の期待に応えてくれるはずだ。

第四章 年の瀬はソバの季節

古泉は俺とハルヒが付き合い始めた事でハルヒが大人しくなることを多少は期待していたのだろう、だがそれが必ずしも正解では無かったことを普段は澄ました顔に汗を浮かべて身を以て実感しているはずだ。つまりは『やるとなったら徹底的にやらないと気が済まない』、『中途半端が一番嫌い』な性格は少々の事では変わりはないという事だ。おかげをもって明日に大晦日を控えてかなたを除くSOS団全員が部屋に揃いハルヒの号令のもとで部屋のテーブルに敷いたビニールシートの上で蕎麦粉と格闘しているのだ。蕎麦粉やその他の道具は古泉がハルヒの命によりどこからとも無く取り寄せて持ち込んだもの、そして蕎麦打ちはハルヒの材料混ぜてりや気合いで何とかなるわよという実に効率的な指導の下、作るなら絶対十割蕎麦しか許さないという無理難題を受け卵をと蕎麦粉を混ぜた塊と悪戦苦闘しているわけだ。

もっとも言い出したハルヒは一向にまとまらない蕎麦の生地到我流で水を足してドロドロにしては粉を加えるという事を繰り返し、ついに飽きたから自分は蕎麦掻きにするとか言い出してカセットコンロに乗せた鍋で湯を沸かしてその中に何とか柔らかか目の塊となつた蕎麦をスプーンで掬っては放り込んでいる。

朝比奈さんは長門の言を入れて密かに小麦粉を混ぜて二八蕎麦に挑戦しておられるらしいが、その細腕で蕎麦の塊との格闘にはどうみても勝ち目は有りません。ご自分でも悟られたのでしょうか、卵大の大きさの塊をとりわけそれを粘土細工の様にこね回しておられませんが果たしていつになったら出来上がる事やら。

かくして明日、我々その他がめでたく年越し蕎麦が食べられるかどうかは俺と古泉の両腕にかかっているという訳だ。古泉は一応道具を借りるに当たって蕎麦の打ち方の講習も受けてきたらしく当初蘊蓄を垂れようとしたのだが先にも行ったとおりハルヒの無茶な宣

言で結局その情報は俺と古泉だけで共有していこうやって懸命に働いているわけだ。

あるいは長門なら怪しげな呪文をかければ材料をあれよという間に切り揃えられた生蕎麦に変貌させることが出来るのではないかと思っただが残念ながら長門は味醂と醤油、ザラメで『かえし』という物を作ることとハルヒに命じられ先ほどまで火に掛けた鍋から良い匂いをさせていたのだが今は殆ど褐色の大きな固まりであるところの鰹節を鮑のついた箱の様な物の上で前後に動かして削るという作業に勤しんでいる。

「さあ、みんな、作業を中断して出来たての蕎麦掻きを味わいましょうよ。」

有希、削れた鰹節をたっぷり皆のお椀に入れて頂戴。

みくるちゃん、そのお椀に『かえし』をちよこつとずつ入れてこちに渡して」

ハルヒはお玉で蕎麦掻きという物らしき灰色の固まりをゆで汁と共に大量の鰹節と味醂と醤油にザラメを加えて煮詰めたという代物の上に入れていく。

「薬味が無いのが残念ね、みくるちゃん、確か七味がどこかに有ったわよね。」

お箸と一緒にもって来て頂戴」

「はい、この間、鶴屋さんと大学の下見にいったときのお土産の七味で良いですか」

「勿論よ、折角の出番なんだからドーンと持つてらっしゃい」

恐る恐るハルヒが作った蕎麦掻きというものに箸を付ける。そもそも俺は蕎麦掻きたるものが本来如何様な物なのかとんと知らぬ、知らぬというのは恐ろしい物でこれが蕎麦掻きだと言われればそのまま信じて美味しいと思ってしまうから困った物だ。

「キョン、何をぶつくさ言ってるのよ、美味しいなら美味しいと素直におっしゃい」

肉体労働に勤しんだ身体にはこの甘辛さが堪らんし鰹節が効いて

七味の風味も良いと思うぞ。

「肝腎の蕎麦掻きはどうなのよ」

温かくて腹持ちも良さそうだし不味くは、いや、美味しいと思うのだが本来どのような食品かを知らないので判断に苦慮してるんだ。

「キヨン君、そんなに何でも常識で計ろうとしてありのままの美味しさをわかってあげないと涼宮さんに嫌われちゃいますよ」

「その通りです、僕は非常に美味しく頂いています」

長門も食べる手を休めてじっと俺を見ている。何を喰わされているのか分からないという不安があったにせよ材料はそば粉と卵と水な訳だから喰えない訳ではない。それにこれがこういう食べ物だと言われればそれなりの様な気が確かにしてきた。

よく分からないにせよ、美味しいと思う。

「釜揚げも良いですけど、明日はどんなお蕎麦にされるんですか？」

「それは明日どこで蕎麦大会をするかに依るのよね。」

今思ったんだけど、部室ではコンロが足りないわ、蕎麦を茹でるのと蕎麦つゆをつくるのだけでも最低二口はコンロが必要よね、さらに天麩羅とか揚げるならもっとコンロが要るわ」

となると誰かの家って事になるが。

「ねえ、有希ちゃん、貴女の所は駄目かしら？」

「駄目ではないが、私は明日おせち料理を習いに行く」

って、長門、ひよっとして俺の家でお袋に習うのか？

「そう、約束してある」

「それなら話は早いわ、私も一緒に習いに行つて夜キヨンの家で蕎麦パーティーよ。」

キヨンの所なら天麩羅とかだつて出来るわよね。

有希、後で一緒に買い物付き合つて。

キヨン、あんたは荷物持ち！！！！」

ハルヒの命を受けてお袋に電話をする、もちろんハルヒと長門が来ることに嫌というはずもなく、プラス二名も了承。ついでに買つてくるように言われた品々のメモさせられたのは良いが、ハルヒ蕎

麦打ちが途中だし、部屋の片付けもしくなくちゃならないだろ、どうするんだ。

「そうね、見てると古泉君が意外と筋が良さそうね。

蕎麦の始末は古泉君に任せるわ。

みくるちゃんは蕎麦掻きの片付けしたら帰って勉強して良いわよ。で、部屋の大掃除は、キヨン、あなたが明日の午前中にする、これで丸く収まるわね」

え、俺一人？

「そうよ、みくるちゃんは受験生だし古泉君は今から大仕事よね。

私と有希は朝からお節にかかるから必然的にキヨンが掃除当番。

どう、合理的でしょ？

じゃ、みくるちゃんと古泉君、後はお願いな」

「畏まりました、では私は明日は何時頃伺えばよろしいでしょうか？」

「そうね、ちよつと遅いけど、夜九時ぐらいでどうかしら。

みくるちゃんも大丈夫？」

「あ、はい、大丈夫です」

「二人ともちゃんとお腹空かせていらっしやいな、

古泉君、お蕎麦はその時お願い。

じゃ、有希、キヨン、行くわよ」

という訳で小さく手を振る朝比奈さんに後ろ髪を引かれつつハルヒに追い立てられるようにして部室を後にした。

ハルヒはお節とか家でも手伝うのか？

「そうね、だし巻き卵は得意よ。

あと、コンニャクに切れ込みいれてくるつとひっくり返すのとか、確かにハルヒの卵焼きは旨いからな、

そういえば長門は揚げ物が上手いよな、蕎麦の天ぷらも楽しみだな。

「何の天ぷらが良い？」

かき揚げも捨てがたいけど、やっぱりどーんと海老が良いかしら」

「まかせて」

すこぶる嬉しそうなハルヒと長門と一緒に年末で賑わう市場をまわり材料やら頼まれた物を買いそろえて漸く家に帰り着いた。

お節を習いたいという二人に気を良くしたお袋は早速数の子の塩抜きを仕方教えると言つて二人を連れて台所へ行つてしまった。

その夜、結局ハルヒと長門は少し早めの夕食を俺の家と一緒に済ませ、ハルヒは7時過ぎに迎えに来たお袋さんの車で長門と一緒に帰って行つた。

翌朝、はらはらと白い物の舞うなか、ハルヒのくれたマフラーをして独り部室に着いた俺が掃除を始めると間もなくハルヒと長門が部室に現れた。

どうした、お節作りじゃなかったのか？

「結構昨日下ごしらえしちやたから時間に余裕が出来たんで見に来てあげたのよ」

そうかい、そりやありがたい事だ、少しは手伝つてくれるのか？

「そうね、私は自分の机の周り、片付けてあげる」

「本棚」

二人ともそれぞれのテリトリーは自分で掃除してくれるらしい。

不思議なものでそこに居てくれるだけで先ほどまでのなんとなくしんでいた空しい気持ち薄れているのに気づく。

大まかなところはつい先日クリスマス会の後にも掃除してあつたので掃き掃除、雑巾がけその他をしても結局一時間あまりで掃除が終わってしまった。もっともこれには収集された雑多な物品の廃棄をハルヒが頑として拒んだせいもあるのだが。

掃除を終え、団長席に鏡餅を置き、部室の入り口の上にしめ縄を飾り、扉の両脇にはプリンターでプリントアウトされた門松にハルヒが拾ってきた松葉をくつつけた簡易門松を切り抜いて貼り付け迎春の準備を終えると三人揃つて北高を後にした。

「ねえ、キヨンは餅つき、したことがある？」

残念ながら覚えがないな、お袋に言わせると幼稚園の時にそういつた行事が有ったらしいが俺はとんと覚えていない。

偽サンタが出てきたクリスマス会はちゃんと覚えてるんだがな。

「私は小さい頃、おじいちゃんの所で村の人とかも集まってお餅つきしたのを覚えてる。」

台所のコンロの脇に竈があつたの、覚えてる？

あそこに大きなお釜を置いて、その上に木の枠でつくつた蒸籠を何段も重ねて餅米を蒸すの。

すつごく白い湯気が上がつてね、蒸し上がったお米を木の大きな臼に入れてお爺ちゃんとか男の人が交代で杵で突くのよ。

大きな杵がドスンって落ちてくるのみて恐かつたの覚えてる。

おばあちゃんが臼の中に水をつけた手をさつと入れてお餅をひっくり返すんだけど、手がつぶれちゃうつて泣ちやつて、それでもずつと見てた。

出来たお餅を木の板の上に白い粉一杯撒いてその上でお餅の形にしていくの。

小豆も炊いて餡もつくつてそれを中に入れた餡餅も作つて食べたの思い出しちゃつた。

来年は絶対餅つきするわよ」

ハルヒの祖父さんところで餅つきとか、楽しそうだな。

来年は受験で無理かもしれないけど、その次は正月みんなで押しかけても楽しそうだな。

「まだ来年にもなつてないのにその先なんて気が早いわよ。」

でも、ねえ、有希も一緒に行こうね」

俺もハルヒも長門が頷いたのを見逃さなかつた。

嬉しそうに笑うハルヒ、この一年でハルヒは確かに変わった。長門も変わった、多分俺も変わったんだろうな。

「一番変わったのはキヨンかもよ、

だけどさ、私、本当に変わった？」

ああ、変わったと思う、それも良い方へ変わった。

どこかどう変わったって言いにくいけど、やっぱり成長してると思うな。

「そうね、それぞれが成長してるんだよね」

坂の下の閑散とした自転車置き場から自転車を引つ張り出す。ハルヒがサドルに座り、長門が荷台に座り、俺が二人が乗った自転車のハンドルを懸命に押して家に向かう。腹減った、帰って早く昼飯にしような。

その夜、つまり大晦日なんだが、結局のところ朝比奈さんと古泉は予定より一時間も前に我が家に到着した。古泉曰く、俺の家で蕎麦を打ち直すという事だ。何でも蕎麦はやはり打ち立ての方が良いし、何より昨日の出来に満足がいかんかったらしい。俺としては朝比奈さんがちまちまとこねていた蕎麦を是非とも喰いたいと楽しみにしていたのだが古泉にしては頑なに打ち直す事を決意しているようだ。ハルヒも昨日やってみて懲りたのかそれなら好きにすれば良いと何時になく聞き分けが良い。ハルヒにしても普段と違う古泉に少々面食らったのやもしれぬ。朝比奈さんはハルヒと長門が作ったお節料理を一品ずつ説明してもらいいかにも珍しそうに味見をしている。どうやらクワイというのは初めて見たらしく芽が付いたままのその姿を珍しそうに菜箸でツンツンとつついておられる。

そこうしていると妹が呼びに来たのでハルヒ、長門、朝比奈さん一緒に揃って居間に行くところには臨時の蕎麦道場と化していた。一面に新聞紙を敷き、その上に置かれた座卓の上にも新聞紙、そしてその上には打ち粉が打たれた大きな板が置かれその上に古泉が捏ねた蕎麦の塊を移したところだった。

先ほどまでよほど力を込めて蕎麦を捏ねていたのだろう。端正な額にうつすらと汗が滲んでいるのが見て取れる。

古泉は蕎麦の塊の上にも打ち粉をふるい分厚い円盤状に塊を押し広げると麺棒を取り出した。これにも手際よく一番粉を塗すと丹念

に蕎麦の塊を押し広げ始めた。素人には分からないがそれでも結構腰が入って様になっている。旨い蕎麦が出来ないとこの世の破滅だとか機関のお偉いさんにも言われて必死で特訓でもしてきたのか？ だとしても俺はそんな話しは聞いてやらないぞ。朝比奈さんにこうやって尊敬の眼差しで見られているだけですでに十分過ぎるほど報われているんだから何故に俺までお前の苦労話を聞かなくちゃならないんだ。

薄くのばされた生地を丁寧に畳み始めたところで長門は台所へ鍋の用意に戻っていった。

ハルヒ、天麩羅は出来てるのか？

「大丈夫、コンロが空いてるから有希が隣で揚げるって。」

それより古泉君、それ切るのやらせてよ」

「それは助かります。」

「お願いします」

「任せなさい」

ハルヒ、おい、菓子麺じゃないんだぞ、幅一センチもある蕎麦なんぞ見たこと無いぞ。

「良いの、食べれば一緒。」

でも結構同じ太さで切るって難しいわね」

その後ハルヒはしばらく菓子麺と素麺や斜めに切れた細長い三角形の様な不思議な形状の蕎麦を切り出していたが結局飽きてしまい、ハルヒに代わり古泉が残りを切ると台所の大鍋で二人分ずつ茹でていく。その横では熊さん割烹着を着た長門が器用に海老の天麩羅を揚げている。

かなたが居ないのが残念だがかなたが帰ったらもう一度蕎麦パーティーをしてやりたいな。古泉、そのときはまた頼むぞ。

「かしこまりました」

出来上がった最初の蕎麦は俺とハルヒに回ってきた。

「伸びますから先に食べ始めてください」

「言われるままに箸をつける。」

長門が鯉節を削り、かえしから作った渾身のそばつゆも旨いし上に乗った天麩羅も旨いが蕎麦も負けてない、喉越しも香りも結構いけるじゃないか。

やがて除夜の鐘が遠く聞こえてきた。そうか、いよいよ今年も暮れて新しい年が来るのか。

「古泉君もみくるちゃんも、そろそろ行くわよ」

俺が感慨に耽る暇も与えずハルヒがまた何かを思いついたらしい。聞こえなかった事にして目を閉じて足先に神経を集中痛して先ほどから炬燵の中に潜り込んでいるシャミセンの居所をまさぐっている。と突然左の耳が引つ張られた。もちろんハルヒにである。

「キヨン、聞こえなかったの」

俺もなのか？ と片目を開けて上を見上げるとそこには満面の笑みをたたえたハルヒがいた。

「キヨンを置いて行くはずじゃないじゃない、だってキヨンは……」

分かった、すまん。こうストレートに来られると対応に困る。でももちろん長門も行くんだよな？

みると既に立ち上がっていた長門が俺に向ってコクッと頷いた。

で、ハルヒ、いったい何処に行くんだ？

「決まってるでしょ、初詣よ」

玄関を明けるとアスファルトの上にまたも薄っすらと白いものが敷き詰められ街灯の明かりを反射してキラキラと輝いている。そして空からははらはらと細かい雪の粒子が舞い降りてくる。頬に凜と冷たい大気が触れ、ハルヒの吐く息が白く俺に向って流れ来る。

「キヨン、マフラーふっわふわであったかい」

「ああ、俺も首筋が温かだ。ありがとうな」

俺がそう答えるとハルヒは俺の右腕に腕を絡ませると俺を引つ張って歩き始めた。おい、何をそんなに急ぐんだ？

「早くしないと年が明けちゃうわよ」

後ろをふり帰るといつも以上にやけた古泉と紺色のウールのマ

フラーを口元まで撒きつけ白いミトンの手袋をした長門が並んで歩いてくるのに少し遅れて朝比奈さんが白っぽいファアのショートコート羽織って小走りに付いて来られる。

ハルヒ、俺たちだけ先についても仕方ないだろ。こんなスピードじゃつく頃にはくたびれちまうぞ。

「だつて……」

心配するな、そんなに急がなくても、引っ張らなくても俺はハルヒの隣を歩いてく、だから安心しろ。

「本当、本当に本当？」

ああ、勿論だ。それに、こんなにも色々な事があつたこの一年、俺たちを成長させてくれたこの一年にもうすこしゆっくり感謝して新しい年を迎えたい。

「キヨンって、時々メチャ年寄り臭い事を言うのね。でも、分かつた。キヨンがそう言うなら一緒に少しゆっくり歩いて見る。そうよね、今、この瞬間をもっと感じなくっちゃね。」

そうやって夜の道を夏祭りの折にも向つた神社の境内へ向つて歩む俺たちに雪は静かに降り続けた。

第五章 新しい年 第1節

年明け早々ハルヒはいつにも増して元気いっぱいだ。ちようどはらはらと降りしきる雪の中、除夜の鐘が終わった時に神社の拝殿前に着いた俺たちは五人でうちならんで賽銭を投げると勢いよく紐を引いて鈴をジャラジャラとならしたハルヒに合わせて両手を合わせて頭を垂れる。ここに居ないかなたを含めたSOS団の全員の無病息災を祈り、シャミセンの分を含めて家族の健康と無事故を祈り、世話になつた鶴屋さんやハルヒの家の家族や祖父さん祖母さんの健康を祈り、勿論ハルヒがトンでもない事件を引き起こさないようにくれぐれも祈り、ついでの世界平和まで祈ってもう良いだろうと薄目をあけて隣のハルヒの横顔を覗く。甘かった、ハルヒは賽銭の百円の何十倍もの願い事をしていたに違いない。俺が後ろの人を氣遣いその場を離れて随分してからハルヒは顔を上げ辺りを見回して俺たちを見つけると走るように駆け寄ってきた。

「あんた達随分早かつたけどちゃんとお祈りしたの？」

ハルヒよ、それは違うだろう。ハルヒのお祈りが長すぎるんじゃないのかという俺の心配を意に貸さず、

「キヨン、しつてるでしょう、八百万の神々っていつて日本にはものすごい数の神様が居るのよ。たったあれだけの時間じゃまだまだ足りないぐらいだわ」

と、しらつと言つてのける。いつたいその八百万の神々に何をお願いしたんだ？

「キヨ、キヨンには関係ないんだから。さ、次はおみくじよ」

それぞれに引いたおみくじを境内の木の小枝に結びつける。

「キヨンは何だったの？」

「俺か、俺は末吉だそうだ」

そついう俺からハルヒはおみくじをひったくるとじつくりと境内の裸電球の照明で読み始めた。

「ふうん、学業、努力すれば報われる年だって、良いじゃない、で、恋愛は……」

「こら、要らないところまで見るな！」

前に行く縁起物の飾りのついた破魔矢を持つ中年の男性や、ぐつたりと眠った子供を背負った若い夫婦連れに混じって境内を歩く。ハルヒ、長門、朝比奈さんは屋台で買ったふんと甘い匂いのある白いフワフワの綿菓子をそれぞれに手にしている。ハルヒは食べていた綿菓子をひよいと俺の顔の前に差し出した。俺が釣られて一口食べようとするとすつと綿菓子を引き戻してさも引つかかったと言わんばかりに嬉しそうに笑うハルヒ、くるくると回しながら淡々と食べる長門、鼻の頭に綿菓子をくつつけて珍しそうに周りを見ながら食べもって歩く朝比奈さんの姿を俺は記念すべきカットとして心のフィルムに焼き付けた。境内を出たところで片手をあげるて黒塗りのタクシーを止めた古泉が訊ねる。

「どうしましょう、涼宮さんも一緒に送りましたよか？」

「ありがとう、でも、私はキョンのところにお母さんが迎えに来てくれるから良いの。みくるちゃんと有希を送ってあげて」

ハルヒの答えに少し不満なのか俺をみつめる長門に小さく頷いてやると長門は朝比奈さんに続いて後部座席に座る。古泉が慇懃に一礼して助手席に乗り込むとタクシーはゆっくりと道の暗闇に消えて行った。

ハルヒと並んで家に向って歩き始める。ハルヒは左手の手袋を外すと俺のコートの右ポケットにその手を滑り込ませた。分かったよ、俺も右手をポケットの中に入れ、ハルヒの手を握る。ぐつと力をこめると握り返す俺とハルヒの間には家に着くまで口に出す言葉はなにも無く、ただ静かに暖かな時が流れていた。

第五章 新しい年 第2節

ハルヒのお袋さんが勤務を終えて俺の家に迎えに来たのはすでに午前一時半を回っていた。

「キヨン、一年の計は？」

別れ際にハルヒが言った言葉。勿論俺は「元旦にあり」って答えたさ。だがその浅はかさを知ったのは午前八時丁度の事だった。

「移動する時間が勿体ないからキヨンのところで済ませるから、良いわね」

「ああ」

けたたましく鳴った携帯を開くなり飛び込んできたハルヒの罵声に思わず条件反射でそう答えてしまった。だがいったい何の事だ？

俺は睡眠不足を訴える俺の両瞼に必死で開眼を命じベッドからやつとの思いで起き上がり俺の脳内に留まることを拒否して反対の耳から滑り出ていこうとするハルヒの罵声を引き止めて反芻する。俺の所で済ませる？ 何をだ？ 分からん、ハルヒの思いつきが予測できた試しは無いし、たとえ予測できたとしてもそれに対する有効な手立てが有るはずもない。俺は無益な思考を停止しとりあえず洗面所に向かうことにした。家ではまだ誰も起きていない様だ。玄関を開けると外はうっすらと雪化粧をしている。ブルツと身震いしながら分厚い元旦の新聞をとりこみながらそれでも少しばかりは清々しい気分のする大気を深呼吸して空を見上げた。

「おつはよ！ 出迎えご苦労さあ〜ん！」

突如通りの向こうからどこかで聞いたような声がする、マ・サ・カ・な？

「キヨン、新年早々良い心がけね」

「いや、朝早くから申し訳ない」

「キヨン君、明けましておめでと〜うございます……って、これ、初詣の時に言ったからもつ言わなくて良いんですかあ？」

「賀正」

そう、旅行中のかなたを除くSOS団のフルメンバーが揃って俺の家の前にやってきたのだった

俺は大急ぎで着替えてベッドを片付けるととりあえず四人を俺の部屋に案内した。

「もう、年が明けたつてのに進歩の無い部屋ね。ま、良いわ。こんな事だろうと思って家から持ってきたのよね。古泉君、これ飾って頂戴。」

みくるちゃんと有希はお台所よ」

ハルヒが取り出したビニール袋からは小さなお鏡餅と組み立て式の三宝なんぞが出てきた。古泉はそれを三宝を器用に組み立てると本棚に置きハルヒが持ってきた餅と葉付き蜜柑を乗せる。

「いや、流石に涼宮さん、用意が言いですね。ほら、こつやつて鏡餅を飾るといかにもお正月だという気持ちがおめでたい気分になりませんか？」

まったくおめでたいのはお前たちの方だ。元旦早々、朝っぱらからハルヒの思いつきに付き合わされてのほほんとしてられるんだからな。

「そう言わずにこの際一緒に楽しんだほうが得だと思いませんか。やってみれば実際楽しいですから」

そういえば蕎麦打ちも随分気合が入っていたな。森さんにでも特訓を受けたのか？

「特訓を受けたのは事実ですが森さんにはありません、田丸圭一さんです」

意外だな、あの人にはそんな趣味があったのか。

「詳しい事は存じませんがプロの職人として直ぐにでも店を開けるレベルだそうです。でも教わったおかげで僕自身形が有るものを作るのも悪くないと思うようになりました。全く涼宮さんのおかげですよ」

摩訶不思議な空間で破壊の限りを尽くすハルヒの鬱憤の産物を消滅させると言う全く持って生産的とは言いがたい胡散臭いバイトに明け暮れるよりは確かにその方が良いのは認めてやる。だが俺はそんな事とは一切関係が無い唯の普遍的な属性しか有さない高校生だぞ。

「貴方が僕の生業についてきちんと把握してくださっていることには感謝します。そろそろ忘れられたのではないかと危惧していましたが。ですが貴方の属性については僕の方が正確な認識を持っているようですね。貴方は唯の高校生じゃない、ですよね？」

古泉の奴、いったい何が言いたいんだ。まだハルヒ絡みの夜迷い事でも講釈するつもりか？

「ううん、ちよつとニュアンスが違いますね。貴方の正確な属性は最近になって漸く正式に付き合い始めた彼女の訪問を元旦早々受けている幸せ者ではないでしょうか？」

こ、古泉の奴。確かにここまで愚直に言われればそんな気がしなでもないが、だが、百万歩譲って万が一そうだとしてもそれなら何故に此処に……と俺が反論しようとしたとき朝比奈さんの声があった。

「キョン君、古泉君、用意が出来たからいらしてくださいって涼宮さんが呼んでますよ」

「ほら、麗しの彼女が呼びですよ」

そういつて朝比奈さんの真横をすり抜けて先に部屋から出て行ってしまった古泉の後を追って部屋を出る。ダイニングには俺が見たことの無い柄のお重が並べられていた。どうしたんだ、これは？

「昨日作ったときに私たち用に持ってきたお重に詰めさせて貰ったの。だから中身はキョンの家の家族用と殆ど同じよ。」

みんな良い？ じゃ、お屠蘇を持って頂戴」

そういつとハルヒは前にあつたぐい呑みを持って立ち上がった。

「これからSOS団、新年の議を執り行います。まずは明けましておめでとう、今年も世界を多いに盛り上げるわよ、乾杯！」

ハルヒが作ったという雑煮は里芋や揚げなどの具と一緒に丸餅が入った澄ましの雑煮だ。聞けばハルヒのお袋さんに習った雑煮だそうだ。

「こんな雑煮は初めてでビックリしたけど結構美味しいな」

と、俺が褒めると、朝比奈さんも

「はい、具たくさんで美味しいです。去年鶴屋さんの所で頂いたのとはあんまり違うので私もビックリです。お雑煮って色々なのが有るんですね」

と、しきりに関心しておられる。

「餅は丸餅、切り餅、色々あるそうですね、味噌仕立て、澄まし、中には小豆が入ったいわゆる善哉を雑煮とするなど、地方によってお雑煮も様々だと聞いたことがあります」

すかさず古泉が蘊蓄を披露している所へハルヒが大きく咳払いをした。

「おほん、正月談義も良いけれどまず今年のSOS団の行動計画を発表するわっ！ キヨン、真面目に聞きなさい。今年の目標はジャンプです！ ホップ、ステップ、ジャンプの三年目よ。去年は少々不本意な形ではあったけど全国デビューもしたし、合宿のおかげで全国模試でも六人中四人が一覧に名前が載るところまでになって私たちの存在も在る程度は認められてきたし、それに、なによりみんなと一緒にやってこれて楽しかった。だから今年は去年よりもっとスーパーでマルチでスペシャルなSOS団にするの、以上！」

あいも変わらずハルヒの発言内容は意味不明だが古泉も朝比奈さんもパチパチ拍手をしている、それほどのものだったのか？

「勿論です。涼宮さんが概ね去年の活動に満足され、さらに上を目指しておられる。今年中に生きた恐竜を捕獲するとかブラックホールを作るとか言いだされるよりはるかに現実的で良いではないですか」

古泉は数の子を箸で摘んで目を細めて眺めながらそう囁いた。確かに機嫌は良さそうだしな。

「ええ、クリスマスパーティー以後、非常に良い状態です。ブルーフォックスのマフラーも大変気に入られた様ですから」

「ちよつと、キヨン、何をひそひそ話してるのよ」

そう言つとハルヒは少々不満そうに唇をカモノハシに擬態させて俺を睨む。

「何でも無い、クリスマス会の事をちよつと話してたんだ」

俺がそう取り繕つとハルヒは一瞬上を向いて右手の人差し指で額の力チューシャをトントンと叩いてなにか思い出そうとして……意外な事を言つた。

「森さんにクリスマス会で薔薇の花束プレゼントしてた、えつと、谷口、だっけ？」

あいつ、まさか留年とかにはならないわよね。多少でもSOS団に関係しながら留年するとかは絶対許さないから、キヨン、ちゃんと言つておいて」

いい加減名前ぐらいちゃんと覚えてやれ、中学からの同級生だろう。確かにあいつは俺の試験結果をみると裏切り者とか言わないから良くはないのかもしれない。

「確かに彼も準団員のに学内ではみられているかもしれませんが一万が一留年とかになれば涼宮さんのプライドに傷がつきかねませんね、調査を手配いたしましょう」

古泉はそう言つと早速、懐から手帳を出してメモをしている。なんとご苦労なことだ、せいぜい頑張ってくれ、と、その時の俺は思っていた。

「古泉君、手帳だしてるなら今年の具体的な事業計画を作って置いてくれる？」

「はい、早急に」

ハルヒの指示に古泉は手帳をヒラヒラさせてそう答えた。

第五章 新しい年 第3節

御節料理を囲んでの本年第一回SOS団ミーティングではその後各自今年の抱負やら何ぞを述べさせられハルヒの希有壮大かつ具体性の全く無い（引き続き全宇宙にSOS団の存在を発信し続けるって、どうやって具体化するっていうんだ）演説を拝聴して終了となった。丁度起き出してきて眠たそうな声でお袋が俺を呼んだからつてのもあるがな。後片付けをしてきている長門を残し俺の部屋に戻るとハルヒはバッグから大きい封筒を人数分取り出した。

「何度も言うけど、一年の計は元旦にあり。詰まらない事で足を引つ掛けないように今年も勉強も手を抜いちゃだめ。早速だけど夏休みにやってもらったのと同様のセンター試験の模擬問題を配ります。明後日回収して採点するから各自それまでにやって置くように。ズルしちや駄目よ。自分の実力でやること。古泉君、そろそろ時間かしら？」

「まもなくです、あと十分ばかりかと」

ハルヒの奴、古泉と何を企んでいるんだ？ 俺が古泉に問いかけようとする前に、朝比奈さんが泣きそうな声を上げられた。

「ふえっ、何なんですかあ？」

「あ、大丈夫です。涼宮さん、説明しても宜しいですよね？」

「いいわよ、古泉君の持ち込んだ企画なんだから」

「まもなく車が参りますのでそれで河原の方へ移動していただき、皆さんには凧揚げを楽しんで頂くこうと考えております」

なるほど、今年は雪山などの大掛かりな企画が無い分、古泉としては近場でそれを補う企画を持ち込んでハルヒに要らぬ思いつきをさせない積もりでいるのだろう。

「本当なら晴れ着に着替えて遊びたいところだけど、機能性重視で今年は着替えは無し、キヨン、残念だったわね」

「ああ、全くだ。着物でも着ればハルヒももう少しおしとやかにな

つてくれるかと期待したんだがな」

俺が小声でそう漏らすとハルヒがほんの少しニタツとした様な気がした。古泉が時計を見て「そろそろ時間です」というのでそれぞれにコートを手を玄関に向かうと妹が眠そうな顔をしながら居間から顔をだす。

「あ、ハルにゃんにキヨン君、イツキ君も有希にゃんもみくるっちやんも明けましてオメデトウ。ね、ね、どこ行くの？」

「おめでとございます。はい、これは我々からです。で、私もは今からたこ揚げに参りますが妹さんもご一緒されますか？」

懐からさりげなくお年玉袋を取り出して渡しながら古泉が要らぬ事を尋ねる。

「あ、ありがとう。急いでご飯食べてくるから待っててね」

妹の奴、もらう物を貰ったら上にまだ一緒に遊ぶつもりか？

「良いじゃないですか、陸奥さんが居られないので丁度座席が一つ空いているのですから」

古泉のお陰で玄関の前に停まった森さん運転のミニバンに乗り込んで妹の用意が出来るのをしばし待つ事になる。最後尾の座席の朝比奈さんに並んで座ろうとしたらさつと古泉が朝比奈さんの隣に乗り込んでしまい俺は二列目にハルヒと並んで座り、長門は当然の様に前列助手席に陣取った。つまりは妹が出てくれば俺とハルヒの間に割り込んでくるのか？

十分ばかり待った所で漸く妹が玄関から出てきた。俺がドアを開けてやり降りようとしたらハルヒがグツと俺のズボンのベルトを引っ張り……俺は妹とハルヒの間に座らされることになった。

「おい、ハルヒ？」

俺が一言文句を言おうとハルヒに向き直るとハルヒは素知らぬ顔で窓ガラスに額をくつつける様に車の外をみているのだが何故か俺の方に左手をそっと伸ばしてくる。仕方なく、誓って言う、仕方なくだぞ、俺はハルヒの手をとり俺のコートのポケットに引き入れぐ

つと手を握ってやるとハルヒも窓におでこをつけたまま俺の手を握り返してくる。どうせ古泉と長門にはバレバレなのだろうがハルヒ、それでナイシヨにしている積もりなのか？

「じゃ、人数も揃い用意が出来ましたので、森さん、お願いします」俺の後ろから古泉が声を上げると車はウインカーを出し静かに元旦の道を走り始めた。

クリスマスの日から漸くという感じでつきあい始めた俺とハルヒだが結局のところ団活で共に過ごす時間は長いのだが二人だけの時間となると意外と取れないものだ。こうやって手を？ぐのはその埋め合わせなのだろう、そう思うといじらしくなりポケットの中の手をもう一度しっかりと握りなおす。

やがて車は薄っすらと雪化粧した河川敷にそろりと停まった。車から飛び出した妹を追って車から降りる。強まってきた風に乗って顔に当たる雪粒が痛いほど冷たい。

「うん、冬らしくって良いじゃない。ねえ、古泉君、どんな風？」そういえば車の中では凧なんぞ見かけなかったが？

「今、森さんが出してくれますからちよつと待ってください」

その時、無駄に爽やかに俺にそう言った古泉の後ろから吹きつける雪よりも凍れる囁きが聞こえた。

「古泉、私にスカートで背伸びをしろと？」

一瞬古泉の表情が固まったと思うとそれは恐怖の表情に変わり、そのまま古泉はそつと静かに両手を上げた。

「ば、僕が取ります」

そういつて飛びのいた古泉の後ろからにこやかな笑顔で会釈する森さんの姿が現われた。俺がぎこちなく頭を下げた先に目にしたものは、いわゆる絶対領域と呼ぶものだと言われた谷口に教えられたまぶしい存在があったこともハルヒには内緒にしておこう。

古泉が車の上に積んだキャリーから取り出したのはさまざまな和凧、洋凧というか、カイトというやつだ。ハルヒは早速一番大きな

黄色が眩しい菱形の風を取り出すと俺の所に走ってやってきた。

「キヨン、これ、高く上げて持って、良いっていつまで離しちゃ駄目よ!」

俺にそう言っていると河川敷の道を川上に向かって糸を引ながら走り始めた。十メートルも行かない内に糸が張ってくるので慌てて付いて走る。

「キヨン、離して!」

スピードが乗ったところでハルヒの言葉に従い離れた風は俺の指先から勢い良く離れ風に乗ってグングン天を目指す。ハルヒは立ち止まると風に向き直って空を見あげて糸を繰り出していく。

「キヨン、キヨンも風選んで来なさいよ」

俺はわかったと手を上げると車のところに戻る。妹は鳥の形をした風を古泉に教えてもらいながら揚げている、というか、古泉が妹に使われているのか？

朝比奈さんは白く長い紙の足のついたヤッコ風を森さんに教えて貰いながら懸命にあげていらっしやるのだが三步走っては足元の草むらに足を取られて転倒したり、やっと揚がったとおもったら風がくるくると回り、一瞬下をむいて急降下して地面に落ちたりと大変苦戦しておられる。長門はと見るとくにやくにゃの透明なビニールの両端に竹か何かの骨が二本だけついている奇妙な風を選んだ様だ。

「おい、長門、そんな風、揚がるのか？」

長門は自信有りげにコンマ二ミリ頷くとさっと吹いてきた風に広げた風を差し上げた。その瞬間、それまでグニャグニャだった風は風を孕みピンと張ってぐいぐいと風に乘って上がっていく。あつという間にハルヒの風を越さんばかりの勢いだ。地上では只の透明なビニールだったものが天に上がり光を受けてキラキラと輝いている。シャギーの入った髪を風になびかせ額を露わにした長門がゆっくりと俺の方を向く。

「流石、綺麗だな」

俺の言葉にいつもよりコンマ五秒遅れて長門がはつきりと頷いて

見せた。その遅れは、何の意味だ？

「キヨン、やっぱ代わって、別のする？」

俺が自分が揚げる風を選びかけたらハルヒが三十メートルばかり向こうから大声で呼びかけてくる。特にどれが揚げたい訳でも無い強いて言えば長門の揚げていたグニヤグニヤの風が気になるぐらいなので俺は分かったと手を挙げると選ぶのを止めてハルヒの所へ駆け寄った。「遅い！ 罰金！」とこれ以上言われたくは無いな。

「どお、キヨン、他に面白そうな風、無かった？」

ハルヒは俺に自分の風の紐を押しつけながら尋ねる。長門が揚げている風が個人的には面白そうだがハルヒが他人と同じ風を面白がると思えない。俺が考えめぐねていると人畜無害を装った笑顔で何やら段ボールの箱を持ち古泉が俺達の所へ歩み寄ってきた。

「せつかくの所、お邪魔しますがこれなどは如何でしょう？」

見ると段ボールの中には何枚かハルヒが揚げていたのと同じような少し小ぶりの風が入っている。

「この中から選ぶって、古泉君、どれも小さいじゃないの？」

「いえ、これは連風と言って全部繋がっている風なのです」

「ふーん、面白いかも。キヨン、手伝いなさいよ」

俺は言われるままに先ほどハルヒから預かった風糸を古泉に渡すと連風とやらをハルヒと一緒に箱から取り出す。なるほど、二メートルばかりの間隔で足の付いた色とりどりの菱形の風が箱から出てきた。それぞれの風の中央に穴が開いておりそこを風糸が通っている。

「ねえ、古泉君。これ、どうやって揚げるの？」

「済みません、僕もよく分からないのですがこの風です、何個か引き出して風に乗せれば揚がるのではないのでしょうか？」

ハルヒは再末尾のひときわ大きな黄色い風を手に風下に向かう。

続いて空色の風、さらに様々な色の風が次々に糸に引かれたて段ボールから出てくる。五個ばかり取り出したところで風が空中に持ち

ハルヒが大声で応え、その瞬間、あつと小さな声を上げて倒れかかり、俺は雪をかぶった芝の上にハルヒを抱いたまま尻餅をつくように後ろ向けに倒れる。

「ハルヒ、大丈夫か」

「キヨン、凧が、凧が……」

見ると一番先の二つの黄色と空色の凧の糸が切れ見る間に雲の中へと吸い込まれるように見えなくなってしまった。

「風が強すぎたんだろう、それより、ハルヒ、大丈夫か？」

「う、うん。ごめん、キヨン」

そういつてハルヒは起き上がるとぴょんと俺の方に向き直りちよつと心配そうな顔をして雪の上に座り込んだままの俺をのぞき込む。

「大丈夫だけど、少し寒いかな。そろそろ戻らないか？」

俺の言葉にニヤリとしたハルヒは皆の方に向き直り右手を挙げて大きく振りながらこう宣った。

「みくるちゃん、有希く、キヨンがお善哉食べに行こうって！ 奢りよ、キヨンの奢り！」

第五章 新しい年 第4節

風を片付け、服についた雪の粉を払いながら車に乗り込むと森さんが早速エンジンを掛け暖房を入れてくれた。暖気が足下から吹き上がりほっとしたのか皆の口からため息ともつかぬ息が漏れる。見る間に車の窓は吐く息で白く曇っていく。シートベルトを締めるように森さんから声がかかりぐらりと車は動き出した。運転席の窓のワイパーが次々と拭っていく雪の粒の大きさと大きくなり、降る勢いも先ほどより少しばかり強くなってきたようだ。車は大きく右にハンドルを切り急な坂道を登って河川敷を離れ土手の上へと登っていく。

「ハルヒ、雪も本降りになって来たし、丁度いいタイミングだったな」

車の回旋の遠心力で俺にも垂れかけながら俺の膝に手を伸ばしてきたハルヒの手を手袋を脱いで握って居やりながらそう話しかける。「うん、朝から一生懸命お正月して、ちよつと疲れた。ちよつと寝ておくわね」

手袋を外して俺の手を握り返したハルヒはちよつと鼻にかかった声でそう言っていると俺の肩に頭をもたれた。俺の鼻先でハルヒの力チユーシャの黄色いリボンがフワフワと揺れている。どうしたんだ、この可愛くなりようは？

「キヨン君、私も眠い」

今度はあるう事か妹が俺の左の腕にぺたっとすがりついて目を閉じて睡眠モードに入り始めた。

「あら、キヨン君、モテモテですね」

後ろの席で朝比奈さんがク笑い声をこらえるように小声でそう囁くのが聞こえる。おそらくその横で薄ら笑いを浮かべているであろう古泉と顔を合わせるのも面倒なので俺もそのまま目を瞑って寝たふりを決め込む。

寝たふりだけの積もりだった。最初は車の回転する方向を感じながら今どの当たりを走っているか頭の中でトレースしていたのだが「皆さん、到着しましたよ」という森さんの声でふと気がつくとも車は見たこともない和風の門構えの屋敷か何かの前に停車していた。

「はう〜う、ねえ、もう着いたのかしら？」

「そうみたいだな、俺も眠っちまっていて此処がどこだか全く判らん」

「皆さん寒くてお疲れの様でしたので温泉にご案内しました、古泉の知古の旅館ですのでお気遣い無く。古泉が善哉も用意すると申しておりますので」

森さんの声に古泉の方を振り返る、何だ、そのビククリした顔は？

「え、ええ、勿論森さん分も含めて御用意いたします」
なるほど、どうやら早速先ほどのペナルティという訳らしい。

「あら、古泉君、良いの？ キヨンに奢らせる積もりだったのに」
「おいおい、ハルヒ、せつかくの古泉の好意だ、有り難く世話になるう」

俺がそう言いながら古泉に軽く敬礼をすると古泉はにやっと笑いながらえらく様になった敬礼を返してくれた。

「わお！ 雪、積もってる」

妹はそう言いながらドアを開けるとピヨンと車のステップから飛び降りた。

いつの間にか雪は降り止み明るい日差しを浴びて塀の上の瓦に積もったフワフワとした雪が白く輝いている。

俺も雪の上に降り立つと手をのばしハルヒの手をとって降りるのを支えてやるが、一瞬足下の雪で滑りかけたハルヒが転びそうになるり両手でハルヒを支える形になる。どうしたんだ、ハルヒ？

和服姿の旅館の女将さんらしき人に案内され旅館の門を潜る。広い板張りの玄関でスリッパに履き替え俺たちは入り組んだ旅館の廊下を渡り、離れの二階と思しきところに案内された。前室の奥に十畳ばかりの部屋があり、そのさらに奥には板張りの床、大きな窓で

庭に面した小さい部屋になっている。窓から見下ろすと和風の庭園に雪が積もり中々の風情を醸している。

庭を見下ろしている俺の隣に古泉がやってくと並んで庭を見下ろし小さくため息をついた。

「どうやら先ほどの罰という訳か？ ご苦労だな」

「ええ、判りますか？ どうやらその通りの様です」

「これで許してもらえると良いな」

「お心遣い、感謝いたします」

そう言つて古泉がウインクした時、俺の時計がビビビビと震えた。かなた、どうしたんだ？

「キヨン君、古泉君、お茶がはいりましたあ」

朝比奈さんに呼ばれて古泉が和室に戻った隙に時計の文字盤を確認する。

KANATA・M< 涼宮先輩の体温が上昇しています

え、何の事だ？

KANATA・M< 風邪かもしれませんが

長門は？

KANATA・M< お知らせしました

俺は慌てて座卓のまわりに陣取っているハルヒ達のところへ駆け寄った。確かにハルヒの顔が少し赤い気がする。

「ハルヒ、ちょっと」

俺はそう言つとハルヒの額に手を当てる。自分と比べてみるが、あなたの言つとおり多少体温が高い気がする。

「ハルヒ、熱があるんじゃないのか？」

「なによ、さつきまで寝てたからきつとそのせいだつて。

それよかこのお饅頭、美味しいのよ。

あ、そうだ、キヨン、あんたの寄越しなさいよ、どうせ甘いのは食べないんですよ」

いや、俺だつて風揚げでしたりで甘い物が欲しかったところだが、えい、わかった、そんなジト目でみるなつて。

俺がぶつぶつと異を唱えながら仕方なくハルヒに割り当ての饅頭を差し出すと、

「はい」

と喋ってハルヒが食いさしのほんの小さな饅頭の欠片を俺の口の前に差し出した。

「まったく。仕方なく口を開けてやるとにやっとながら俺の口の方へそろりと摘んだ饅頭の欠片を運ぶ。俺はかつての学習の成果を総動員するとパットさしだしたハルヒの右手首を取り押さえると口を開けたままハルヒの指に向かいパクツと食い付く。」

次の瞬間俺とハルヒは赤面お見合い状態で固まった。何故かって？俺がハルヒの指に饅頭の欠片ごとしっかり吸い付いちまったからだ。

何時ものハルヒなら素早く指を引っ込めるはずなのに……

「ちょっと、キョン、みんなの前で何するのよ」

「そうですね、キョン君。そういった事は二人っきりの時にしてくださいねえ」

朝比奈さん、これは事故ですってば！

おたおたする俺を余所にハルヒは朝比奈さん、長門をさそうと部屋に置いてあった着替えの浴衣と裃、タオルをひつつかみ妹の手を引いてサツサと温泉に行ってしまった。ドタドタ響くと妹の足音が遠ざかっていく。

「僕たちも温泉に参りましょうか」

「そういえば森さんの姿が見えないが」

「森さんでしたら恐らく一足先に温泉で異常がないかチェックをしてきている筈です」

「機関つてのはそんな所までにも色々気を遣っているのか？」

「もちろんです、涼宮さんがこの世界に引導をわたそうなぞと思われないように細心の注意を払うのは当然と考えていますから。ですから貴方の最近の功績には機関でも高い評価をしていますよ」
「別に俺はハルヒがお前達の言うところの神だろうが何だろうがどうでも良いんだ。ただ、俺は俺の気持ちに従ってるだけだ。だからあんまり……」

「判っていますよ、僕だって貴方や涼宮さんとそれなりの時間を過ごしてきた訳ですから。」

あの六百年近くの時を除いても、ね？」

俺は古泉に促され、浴衣や何やらを持つと地下にある浴室へと赴いた。

温泉をゆつたりと堪能し、浴衣に丹前を羽織って部屋に戻ったがハルヒ達はまだ戻っていない。古泉が部屋の床の間の隅に置いてあった囲碁板と碁石を見つけ出してきて嬉しそうにするので庭の見える板の間でガラス天板の籐のテーブルの上に碁盤を広げ向かい合って籐の椅子に座り一曲相手をすることにする。

「いや、実に良いお湯でしたね」

パチリ音を立てると古泉が黒石を盤面に打つ。

「ああ、流石に雪の中の凧揚げは寒かったからな」

「ええ、そうですね。」

所で伺いたいのですが、涼宮さんがどうして元旦からこんなにイベント消化を急いでおられるとお考えですか？」

「知らん」

俺は適当に返事をしながら白い石を置いていく。

「それは今学期、正確に申し上げると今月の二十三日からの行事を大変楽しみにしておられるからでは無いかと考えています」

「そんな時に何かイベントが有ったか？」

古泉がやれやれといったため息をつきながら黒石を打つとまじまじと俺を見つめる。俺は古泉に見つめられても何ら嬉しくはない、む

しろ気持ちが悪い。何だ、そのニタニタした笑いは？

「本当に認識しておられないのですか？

今月の二十三日、私たちの高校における最大の学年行事の一つ、冬季生活訓練合宿とも言いますが要するに修学旅行ですよ」

なるほど、言われてみればそうかもしれない。じゃ、今年SOS団の雪山行きが無かったのはそのせいなのか？

「ええ、その通り。より新鮮に雪のスポーツを楽しんでいたためにこの冬は控えさせていただいたのですよ」

古泉は俺の心を読んだかの様にそう続けた。

俺から見ればそれこそ要らぬお節介とすら思えるのだが、機関とやらはそれだけ真剣なのか、あるいは粘着質の集まりなのか、人ごとながらヤレヤレと言いたくなるのは何故なんだろうとこれまた具にもつかない事を考えながら適当に古泉の相手をしながら石を置いていく。

盤面が半ば埋まり、俺の手元に取った黒石が数個並んだ頃俺の腕時計がビビビと震え、その直後、古泉の携帯が着信を告げ、古泉は慌てて携帯を丹前の袂から取り出した。

携帯を耳元に当て、急に険しい表情となった古泉が俺に背を向けて話しを始めたところで時計の文字盤を確認する。そこには信じがたい事が記されていた。

YUKI・N< 涼宮ハルヒが倒れた

第六章 危機 第1節

俺が長門からハルヒが倒れたと連絡を受けたのと、古泉が朝比奈さんから携帯で連絡を受けたのは殆ど同時であった。

「申し訳ない、涼宮さんが倒れられたそうです。今、森が緊急の手当をしていると朝比奈さんから連絡がありました」

森さんが手当をしてるって？ 森さんが直接古泉に電話出来ないほどに切羽詰まっているというのか？ そこまで考える間もなく俺は旅館の草履を履くと廊下へ駆けだした。

地下へ降りた俺は一瞬、女とかかれた暖簾のかかった入り口の前で硬直した。女湯、は入れねえ。

「ハルヒー！ 大丈夫かー！」

俺が大声で呼ぶと中から浴衣を着た妹が飛び出してきた。

「キョンくん、はるにゃんが、はるにゃんが死んじゃうー」

妹は俺の足元に取りすがって泣き始めた。何だって？ そんな、馬鹿な。ハルヒが死ぬなんて、そんな事、あり得ないだろう？

中でバタバタと音がして、旅館の仲居さんが暖簾の間から顔をだし俺を手招きした。

「彼氏なら良いよ、お入り」

まさか、ハルヒ、何があっただんだ？ 俺はブルブルと震える足で女湯の暖簾を潜った

俺がそこで見たのはびしょびしょにぬれた白木の床の上で横たわる浴衣の足元、ハルヒか？

入り口に背中を向けているのは長門、その向こう側から覗き込むように頭をたれているのは朝比奈さん、ハルヒの頭元と思しき場所にしゃがんでいるのは森さん。時間が止まったかのような光景のなかでハルヒの足元に置かれた扇風機がブーンとうなりを上げ、その風を受けて森さんの浴衣の裾がハタハタと揺れている。

入り口で草履を蹴飛ばすように脱ぎ捨て転げるようにして長門の脇に滑り込む。白地に藍で紋様が染め抜かれた浴衣をかけられたハルヒがぐったりと横になっている。浴衣は水浸しで素肌に張り付いて体のふくらみが妙に艶かしい。腹と胸が荒く上下している。死んでない、生きてる。

「深部体温の上昇と末梢血管の拡張により血圧低下を起こし意識消失を来したものと推察される」

低い擦れる様な声で長門がそう囁いた。見ると長門の浴衣も水でぐっしょりと濡れている。

「長門、お前」

「問題ない、脱衣の時間的余裕が無かっただけ」

「あ、涼宮さん、大丈夫ですか？」

朝比奈さんの声にハルヒの顔を見ると眉を顰めて首を嫌々と振っている。

俺は身体に掛けられた浴衣の脇から覗いていたハルヒの手をとって握り締めた。

それに答えるかのようにハルヒはゆっくりと目を開き、俺をぼんやりと見つめる。

「ハルヒ、大丈夫か？」

「馬鹿キョン、寒い……」

一言ハルヒはこう呟くと再び目を閉じた。

「体温は摂氏38.3度まで低下した」

ハルヒの声と長門の言葉にほっとした俺の鼻が板場の檜の匂い、温泉の匂いに混じってほんのりと香水の様な香りを識別した。そうか、女湯だったんだよな。

「どうやら大丈夫そうですね、それで、古泉は？」

長門の言葉を受けて森さんが俺に尋ねる。

「いえ、済みません。先に飛び出して来てしまった物で」

「ちよつと見てきて貰えますか。その間に涼宮さんには肌着と服を着て頂きます」

俺は言われるま脱衣場を後にしたのだが、つまり……って事はこの浴衣の下、ハルヒな何も着ていなかったのか？

脱ぎ捨てていた履き物を履くと暖簾を潜り廊下へ出る。古泉は？階段で一階への踊り場まで上がった所で清涼飲料水のボトルを両手に持って降りてきた古泉と出くわした。後ろからは缶のオレンジジュースを飲みながら妹も付いて来る。

「ハルヒは湯あたりでもしたらしい、熱も下がって意識も戻った」「妹さんが動転しておられたので心配しましたが、そうですか、良かった」

聞くと古泉は朝比奈さんからの電話で森さんからの伝言を受け飲み物を買いに行ってくれていたらしい。女湯の前に戻ると妹に清涼飲料水のボトルを渡し森さんの所へ届けて貰う。

「貴方は部屋に戻って急いで着替えてきてください。おそらく間もなく救急車が来ると思います。本来なら森が同行するところですが車を置いて行くのは差し障りがありますので貴方と長門さんに同行をお願いすることになります」と

そうか、それもそうだ。この時ばかりは古泉の言葉を褒めてやろうと思ったのだが、何故か古泉は一瞬不安そうな表情を見せた。何か有のか？

「いえ、機関の病院にお連れして良い物か……」

「何故だ？」

「以前お話したと思いますが機関のメンバー全員が涼宮さんに好意的とは限らない。場合によっては涼宮さんの脳髄を調査する良い機会だと思っ者がたり、最悪……」

「まさか、ハルヒの身に何か危険が及ぶとか……」

「私の口からはこれ以上は。ただ、呼ばれた救急車は一般消防のもの筈です。」

「さあ、急いでください」

微かに聞こえてきた救急車のサイレンの音を聞くまでもなく俺は
大急ぎで着替えるために部屋に駆け上った。

第六章 危機 第2節

急いで服を着替え財布とカードを確認して大急ぎで取って戻るとちょうどハルヒが担架に乗せられ皆に付き添われロビーに上がって来た所だった。

「朝比奈さん、森さん、済みません、妹をお願いします。長門、一緒に頼む」

予想通り長門は既に着替え終わっており、先ほどまですぶ濡れで有ったのが嘘の様にサラサラの髪になっているが誰もその事には気がついていない様だ。

「わかりました、責任を持ってお送りしますし涼宮さんのお荷物や着替えなど、直ぐに病院に届けさせて頂きます。病院には連絡してありますから」

何時ものようににこやかにそう言う森さんの目が一瞬古泉に向かったのは気のせいだろうか？

俺は空色の紙製のガウンを着た救急隊員に促されハルヒについて旅館前に停まっていた救急車の後ろに乗り込んだ。

「ハルヒ、大丈夫か？」

「うん、寒いけど大丈夫、もう、大袈裟なんだから」

俺がそう弱々しく言うハルヒの右手を握ると救急車はサイレンを鳴らして出発した。

「ハルヒ、お袋さんに連絡するぞ。今日は勤務か？」

「ううん、まだ家」

俺は携帯を取り出しハルヒの家に電話をかけた。バックで鳴る救急車のサイレンに一瞬びっくりしたようだったがハルヒの状態が落ち着いていることを知らせるとホットした様子。頼まれた携帯をハルヒに渡す。ハルヒが少し喋り携帯を俺に戻した。

「すみません、ハルヒを連れて行く病院なんですが……」

俺は先ほど救急隊の人が連絡していた一昨年の暮れ、俺が入院し

ていた病院の名前を告げる。

「ですが、可能なら、ええ、はい、大丈夫ですか。良かった、じゃ、頼んでみます」

俺は事情を説明し、行く先の病院の変更を救急隊に依頼した。運転席と助手席、ハルヒの枕元の三人の救急隊の人達が行く先の変更についての相談を始めたのを俺は祈るような気持ちでハルヒの手を握りながら聞いていた。

途中、俺は古泉に病院を変更した事を携帯で連絡した。

「そういつた事情ならやむを得ませんね。荷物はそちらへ運ぶように致しましょう」

古泉はやけにハッキリとした口調でそう言って電話を切った。森さんが横で聞き耳を立てていたのやもしれぬ。寒がるハルヒに救急隊の人から毛布を借りてもう一枚身体にかけてやる。握った手もなんだか凄く熱い。

「ハルヒ、こんどはお前が風邪ひいちゃったんじゃないのか？」

「うん、そうかも。風揚げしてる頃から少し身体だるかったんだ」

「バカ、無茶しやがって」

「何よ、キヨンのくせに」

「俺だからだ、俺だからお前のこと、心配なんだよ」

ハルヒはブイツと左を、つまり酸素吸入の機械や液晶のディスプレイの心電図の機械とかが取り付けられている方を向いてしまった。だが右手で繋いだハルヒの右手を軽く握ってやるとビククリするほど熱いその手でぎゅっと握り返してくる。ひよっとして、照れてるだけなのか？

病院に着き、ハルヒが長門に付き添われ救急外来で診察を受けている間、俺は救急外来の待合室でじつと診察が済むのを待っていた。救急車が病院に着いたときは担架で運ばれるのが嫌で一人であるくと駄々をこねたくらいだから大丈夫だとは思いますがそれでも心配な事に代わりは無い。ジリジリとした思い出座っていた時間は多分数分

の事だつたらう。小走りに走る足音に目を上げるとハルヒのお袋さんが慌てた様子で俺に駆け寄って来るところだった。

「ご免なさい、キヨン君。ハルヒは？」

「今、診察中です。長門が付いています」

「ありがとうございます、迷惑かけるわね。見て来ますね」

お袋さんは俺に頭を下げ救急室へ入っていく。

俺、ありがとうって言われるような事、何も出来ていない。ハルヒが身体がだるいのを押して皆に悟れないようはしゃいで見せていたのに、俺、気づいてやれなかった。あなたがわざわざ連絡してくれたのに、それに対応することも出来なかった。本当、こんなんじやハルヒの彼氏失格だよな。

俺が待合の椅子で肩を落としているとバシンと背中を思いつきり叩かれた。え？ 誰？ 余りの痛さに一瞬息が出来なくなった俺が顔をあげるとそこには満面の笑みを浮かべた看護婦さんが俺の顔を覗き込んでいた。だ、だれ？

「もう……嫌ね、私の事、忘れたの？」

あ、思い出した。確か、舞さん。ハルヒのお袋さんのところの期待の新人っていつてた舞さん……ですよね。

「そう、舞ちゃんよ。薄情ね、忘れたら嫌いよ。」

それより、ハルヒちゃん、まだ救急室よね。

はは、その顔、彼女の事を死ぬほど心配して待つ彼氏って顔しよね。

あつ、凶星いゝ。

どうなのよ、夏からかなり進展したんでしょ、ねえ、何処まで行ったのよん。

主任には内緒にて置いたげるから、ねえねえん、おしえなさいよ。

ね、ラブラブ、誰かに話したいんでしょ？」

この人、素面でもこんなペースなんだ。

「進展もなにも、一応年末から正式に彼氏になっただけで別になに

も、その……」

「チユーぐらいは当然済ましてるわよね、んで、それから？」

「そ、それよりハルヒは……」

「心配ないって、ただの湯あたりなんでしょ？」

主任さんもついているんだからなあ〜んにも心配ないわよ。

もう、そんな顔するなんて……

分かった、ハルヒちゃんの事、見てきてあげるから後でちゃんと白状なさいよね」

そう言うなり舞さんは意気揚々と救急室へ入って行ってしまった。なんだか舞さんにごつそりと張り詰めていた気持ちを持って行かれたような、そんな気がした。舞さんの言葉に思わず頬が緩んだとき、どんなに俺の顔が強張っていたのか漸く実感した、と同時に身体の緊張も自覚したので目を瞑り首をまわし、身体を座ったまま少しストレッチしてみる。そうか、俺があんまりガチガチだから舞さんはその緊張を和らげようとしてくれたのか。

舞さんのお陰で少し心にも余裕が出来、ほっとしたところへ森さんと古泉が漸く姿を現した。

「お待たせしました、妹さんには途中からタクシーに乗り換えて帰って頂きました。朝比奈さん同行して頂きましたので大丈夫です」

古泉のそのウインクの意味は、恐らく新川さんがそのタクシーの運転手だと言うことだろう。

「すまない、世話をかける。ハルヒはまだ診察中だが長門とお袋さんが付いている所だ」

「お母様のお勤めの病院なら仕方ないわね。一応調査も済ませてあるし、大丈夫でしょう」

「え、調査って？」

「以前お話ししたと思いましたが。涼宮さんに関心を持っているのは何も我々はSOS団各メンバーの所属する組織だけでは無い、中には相当に無茶をしかねない存在も有るという事です。我々の病院にお連れしたかったのは涼宮さんの安全を確保するためだったので

すが」

「古泉、要らぬ心配をさせてはいけません。

こういった可能性も含め、機関は万端の準備を怠ってはいけません。ご安心ください」

だが、機関の病院にはハルヒを調べてくつうずうずしている気印の医者が居るかもしれないと古泉は心配してくれた……のだろう。森さんが保証してくれるなら、安心して良いのだろうが、だがやはり不安だ。

その時救急室の扉が開き点滴をぶら下げて車いすに乗せられハルヒが出てきた。車いすを押すのは舞さん。長門がハルヒの横につき、お袋さんは救急室の方へ向かいぺこぺことお辞儀をしつつ後から出てくる。当のハルヒは緊張しているのかしつかりと目を開け、不安そうに点滴の袋を見上げていたが俺と古泉、森さんを認め、点滴されていない右手でゆるりと俺たちに手をふってみせる。

「あら、他のお友達も来てくれたのね。

今から病室に行きますから付いてこられますよね？」

舞さんは慣れた足取りで颯爽と車いすを押しながらエレベーターへと乗り込むのに慌てて付いて俺たちも乗り込む。

「最初はただの湯あたりだろうって事だったんだけど、喉とか赤いし、お風呂に入る前から悪寒がしたっていうから、ひよっとしたら何かあるかもしれないから念のため入院ですって。すみませんね、ハルヒが無茶して何時もご迷惑おかけしてますね」

「いいえ、こちらこそ、涼宮さんの体調が優れないのに温泉なんかにお連れして申し訳ありませんでした」

「私がお善哉食べたいってお願いしたの。

あーん、食べ損ねた」

「それだけ元気があれば大丈夫かもね、だけど言うことをきいておとなしくしてらっしゃいね」

「お母さん、もう大丈夫だって。

今日、深夜でしょ、その時着替えとか持ってきてくれたらいいか

ら。

大丈夫、帰って休んで」

「俺と長門で着いてますから」

「居る者が有れば私どもの方で用意させていただきます」

「そうよ、主任さん、あたしも帰ったってどうせ待ってる男もいないから少しのこってるから任せて帰ってやすんでくださいよ。」

いくら主任さんでも準夜明けなんですから、雪降ってるから事故らないようにかえってきてくださいよ」

「あなた達がそう言うってくれるなら、悪いけどハルヒの事、お願いね。」

キヨン君も有希ちゃんも、無理しちゃだめよ、夜までにはお家に帰って頂戴ね」

第六章 危機 第3節

真冬とはいえ、病院の中は暖房が効き、それなりに暖かだ。廊下の端のどうやら避難階段に繋がっているらしい結露したガラスの扉の前で、俺と長門はぼんやりと佇んでいた。

舞さんの話によると、年末年始は帰れる患者さんは正月ぐらいは家と言うわけで病状が良く帰れる患者さんは殆どが外泊しておられ、手術なども緊急性の高いもの以外はしないからという事で病室には結構空きがあり、ハルヒは廊下の突き当たりに近い個室に入れて貰うことが出来たのだ。お袋さんが帰り、森さんが俺たちの食事と飲み物なんかを買いに出てくれ、古泉は携帯が使えるロビーに連絡に行ってしまう、舞さんがハルヒを着替えさせている間、俺と長門は病室の前で二人つきりとなった、ハルヒの着替えの音が漏れ聞こえる所に立っているのも何なので、ふらふらと此処まで来たのだが、流石にガラスの扉の前は底冷えがするような寒さだ。

「なあ、長門。ハルヒは大丈夫なんだろう？」

「かなたの観察によれば何らかの感染症に罹患している可能性がある」

「長門は原因調べたり、治療したりはしてやれないのか？」

「私の役割は観察。」

「観察対象に直接的に関与することは推奨されない」

「方法は無いのか？」

「私には……無い……」

その時、俺の携帯がビビビビ震えた。かなただ。

K N A T A ・ M < 先輩、私なら診れます

「おい、お前は故郷に帰っている事になってるが、もう戻れるのか？」

K A N T A ・ M < ありがとうございます、まだこちらでする事が

残ってます、でも、短時間なら。

「不可視フィールドを展開する」

KANATA・M< キョン先輩と有希姉さまの間に行きます、良いですね

「ああ、大丈夫だ」

次の瞬間、オーバーオールに白衣を羽織ったかなたが俺と長門の真ん中に出現した。

「センパイッ！」

かなたはいきなり俺に飛びついてきて俺の首もとにカプツと噛みついた。ナノマシーン？

「いえ、それは後で、今のは噛みただけ。はっ、満足」。

「おい、かなた、なんだかキャラが変わってないか？

何処に行ってたんだ？」

「あ、分かります？」

世界中、主にベースは北米ですけど、詳しい事は戻った時に。データしてくださいよ？」

「デ、データって……」

「気にしない気にしない、じゃ、行きましようか？」

かなたはそう言うとポケットから聴診器を取り出してクルクルと回しながら俺たちを先導してハルヒの病室へ向かい歩き始めた。だ、大丈夫なのか？

「私だって情報操作、得意ですよ」

くるつと振り向いたかなたの顔は面影を残しつつ、一回り大人の顔だち、トレードマークのツインテはいつの間にか解かれ緩やかなにウエーブした大人っぽい髪型になっている。

「うふ、回診です。舞さん、でしたっけ、今部屋から出てこられますよ」

確かにその時病室の扉が開き、舞さんがそっと部屋を抜け出してきた。

「ヤッホー、キヨン君、ハルヒちゃん寝ちゃったから起こしちゃだめよ。」

寝てるからってオイタはペチペチ、わかっているわねえ〜

でも、お姉さんなら遊んであげるかもって、じゃねえ〜」

どうやら舞さんには長門もあなたも見えてはいないらしい。さつきはちよつと尊敬しかけたが、やっぱりこの人、天然の危険人物やもしれない。

「だ、大丈夫つす、俺、そんな事……」

「もう、分かっているんだから、あんなだけ可愛いハルヒちゃんが眠ってるんですものね、胸元にそつと手を入れたくならなきゃ嘘よねえ〜、誘われてる感じよねえ〜」

そう良いながら手をひらひらと振りながら舞さんはナースステーションの方へと歩いていった。マジ、危険人物決定だ。

「面白い方ですね、あちらでは余りお会いする機会がなかったのが残念です。あなた」

あなたはさりげなくそう言うつとそつと病室のドアを開けるとそつとハルヒの横に立ちハルヒの首もとに指を這わせる。アセトアミノフェンね、解熱剤よ、それで眠っておられるのね。姉さま、ほんの少し、サンプル下さいね。あなたはそういうとポケットからなにやら銀色に光る物を取りだしハルヒに半分覆い被さるようになにかしている。大丈夫、だよな？

あなたは手に持った銀色のリップスティックぐらいの物をちらりと俺にみせると白衣のポケットに無造作にしまつと、俺ににっこりと微笑んだ。

「あ・な・たは私を信頼して下さるのでしょ？」

私はあ・な・たの大切な彼女を傷つけたりしませんから、大丈夫。サンプルの解析にかかっているからもうすぐ結果がでるわよ」

あなたの姿としゃべり方に言いようもない親しみと思いが湧き出してくる、そうだ、きつとあの世界でのあなたはこんな風だったんだ。

「なあ、かなた、あの世界ではお前、そんな風な女医さんだったんだよな？」

「はい、思い出して下さいですね。私、あなたにずっと健康でいていただくてこの道をあの世界では選んだのです。こちらにお連れする直前、きつとこの事も心の何処かで思い出してくださいましたのですね。やっぱり本当にもう、私には悔いはいけません。涼宮先輩を幸せにしてあげて下さいよ」

俺が思わずかなたを抱きしめようとしたとき、ふとハルヒが身じろぎをした。

「ハルヒ、俺だ、大丈夫か？」

俺は思わずかなたの脇をすり抜けハルヒのベッドの横で跪く。

「キヨン、居たの、良かった。」

「ねえ、キヨン。手、握って」

「ああ、ほら、ハルヒ。手、熱いな、まだ熱あるみたいだけど、頑張れよ」

「当たり前よ、キヨンがいるんだもん」

そう言うとハルヒは俺の手を握ったまま再びうつすらと寝息を立て始めた。

「結果が出たら有希姉さまに対策をお知らせします。ナノマシンの注入はキヨン先輩のお仕事ですよ」

かなたは再びにこつと笑うと、可愛くウインクをして病室から一瞬のうちに消え失せた。

「かなた戻った。解析結果によるとライノウイルスの一種による感染と細菌感染の合併を認めている。治療ナノマシンの設計を開始したとの連絡を受けた」

低い声で長門がそう囁く。ハルヒに聞かせて良いのか？

「涼宮ハルヒの脳波は十分徐波化している。問題ない」

KANATA・M< 夢も見ずに良く眠っておられます。キヨン先輩に守られて安心されたようです

そうか、かなたがそう言うなら心配ないんだろう。俺はパイプ椅子

を引き寄せるとそこに座りベッドの布団の端に覗くハルヒの右手を握りながらナノマシンとやらの完成を待つことにした。

かなたが指示したコードに従い長門が合成したというナノマシンは俺の左腕の時計を経由して俺のからだのなかで最終形態となり長門とかなたの指示でま、俺にとっては役得みたいな形でハルヒに注入接種した後の事だ。その直後に舞さんが咳払いをしながら病室に入ってきた事も割愛する。なぜなら思いがけない奴が俺を訪ねて来からだ。病院の面会時間もとくに過ぎたころ、ハルヒの病室の前で言い争う声が聞こえ、息づかいも大分楽そうになったハルヒの手を握りながらうとうととしていた俺は眼が覚めた。聞こえる声は森さん、古泉、そして……

まったく入院患者さんがいくら少ないからってこんな夜の病棟で声を荒げるとは相も変わらず困った奴だ。俺はハルヒの手をそつと離すと小さなオレンジ色の常夜灯が灯った病室を出てほの白い蛍光灯の光で照らされた病棟の廊下へと出て行った。

「だから知らせに来たんです、私そんな患者にしないでください」
長いツイントテを振って森さんと古泉の間でオーバーなアクションで大きな声を上げているのは、おい、橘、何事だ？

「あ、えっと、キョンさん。聞いてくださいよぉ〜」
橘が俺を認めて振り返った瞬間森さんがぴたっと橘の後ろをとり橘が一瞬キャツと悲鳴を上げる。

「森さん、いつたいどうしたんですか？」
「機関の監視をぐくり抜けてこの病院に侵入してきたので今捕らえて尋問を……」

「い、痛いです。せつかく大事なことを教えようと思って来たのに、もう、どうにでもなれば良いです！！」
森さんはさらに橘を締め上げ、古泉は携帯で慌ててなにやら連絡をしている。

「待ってください、ここに俺たちが居ることも、森さんが居ること

もきつと分かっついていてどうしても知らせたい事があって橋がわざわざ来てくれたんだから、橋をちよつと離してやってください」「森さんは一瞬俺を鋭い眼光で見つめ、下唇を？みながら捕らえていた橋の腕を放した。

「もう、信じられないです」

「すまん、ハルヒの調子が悪くてみんな気が立ってるんだ。せつかく来てくれたのには余程の事があるんだな？」

俺の問いに橋は真顔ではつきりと頷いた。

第六章 危機 第4節

「良く聞いてください。涼宮さんが危険です。最後のチャンスだから抜かるなつて言われたつて」

一瞬、橘の言った言葉を頭の中で反芻する。ハルヒが襲われる？

「誰がそう言ったんだ？ 組織か？」

「違うと思います、つて、そんな事どうでも良いでしょう。藤原が久しぶりに来と思つたら変なこと言っんです。やつとこの時間線を探し当てた、これが最後のチャンスだ、失敗したら全てが崩壊するとかつて」

あのいけ好かない奴が益々いけ好かなく思えてきたが、正直、時間線つて何だ？ 橘の言っている事がまるで見えない。しかし未来人の攻撃となればTPDDとかで仕掛けてくるのか？ つまりはそいつは場所も時間も自由に出現できる……

はっと気がついた俺は慌ててハルヒの部屋へとつて返した。

俺たちの声が間違いなく聞こえていたはずの長門は先ほどと変わらずハルヒの足下の所に置かれたパイプ椅子に座り、膝の上に煉瓦ほどの大きさの分厚い本を乗せたままゆっくりと面を上げ俺を見つめた。長門が居れば大丈夫だよな？ 俺はハルヒの元へと駆け寄つた。

俺の足音に気がついたのか、ハルヒはぐつと伸びをするようにして体を擦ると大きなあくびをして眼を開けた。

「キヨン、夜這い？」

もう大丈夫よ、頭痛くない」

あまりにも脳天気なハルヒの言葉に俺はベッドにすがつて脱力しそうになる。俺に続いて森さん、橘、古泉……、そして舞さんも病室に入ってきた。

「あつはつは、ハルヒちゃんやっぱりキヨン君の夜這いを待ってたんだ。」

キヨン君、だから言ったでしょ。 それにしても正月早々随分沢山のお見舞いよね。

あたしは良いんだけどさ、準夜のスタッフが五月蠅くってね、主任さんが来られた怒られるから早めにかえって貰ってくれってさ」「あう、誰です、この唐変木の変態看護婦は。

キヨンさん、そんなにお気楽な場合じゃ無いんですう」

「ね、キヨン、誰、その子」

ハルヒが俺の横から首を伸ばして入り口の逆光の中に立つ橋を見とがめて尋ねる。そうだ、この世界じゃ橋とハルヒは顔見知りという訳ではないんだ。

「た、橋京子です。初めまして、ちょっとキヨンさんと古泉さんに用があつて、その」

その時、病室の窓際のカーテンが揺れ、黒いタートルネックを着た男が姿を顕した。

「はつきり言つてやれよ。」

こんなつまらんガキにつきあうのを止めると忠告に来たとな。

SOS団？ そんな陳腐な青臭い仲良しごっこなんざとつと止めちまえ。

どうせ先は皆バラバラになる、何時までもこんな糞女と遊んでいられる訳も無いだろう。

キヨン、馬鹿馬鹿しいが真実を教えてやる。お前が本当の鍵だ。

お前たちみんな、そこに寝ている糞女なんぞにいい加減見切りをつけるんだな」

「藤原！」

橋が小さな叫びを漏らすと俺の背中に隠れた。

「誰、いつの間にそんなところに入ったの」

舞さんが問い詰めようとすると藤原はヒラヒラとけだるそうに手を振りながら森さんの脇をすり抜け廊下へと出て行った。弾かれたように森さんが後を追って廊下へ出る。

「なんなの、あの変態。キヨン、説明しなさいよ」

「俺にもさっぱり分からん。だが森さんが追い払ってくれる。大丈夫だ」

「ふーん、で、なんで橘さんとやらがキヨンに縋りついてるのよ」
俺の背中に張り付いてた橘がぴよんと飛び退きぺこりと頭を下げ、ふわふわにカールした頭の両脇の髪が揺れる。

「あ、ごめんなさい、キヨンさん取つたりしませんから、あの、今は……ですけど、やっぱり、あう、帰ります」

橘はぎこちなく後ずさりしすると後ろ手に扉を開け逃げるように廊下へと姿を消した。

ビビビビと時計が震える、かなたからだ。

KANATA・M< 緊急で逆行性健忘処置を行います。ナノマシン、行きます

次の瞬間俺の腕時計の裏にチクツとした痛みが走る。

KANATA・M< 15秒後に涼宮先輩に汎用ナノマシンを注入です！

お、おい、かなた、そりや無茶だろう？ 舞さんも古泉も居るんだぞ。彼方の奴、無茶苦茶を言いやがって。だが抗議しようにもハルヒの前で時計を介してかなたに語りかけるわけにも行かない。KANATA・M< あと十秒です、用意してください

よ、用意って。そんなもの出来るか！！

KANATA・M< あと五秒、はい、顔近づけて 自分でカウントダウンしてくださいね

「は、ハルヒ、じ、実はだな」

「な、何よ、キヨン、何ごまかそうとしてるのよ。

私はこういう事はつきりしてくれないと嫌なの」

キツとした目でハルヒが睨む。えい、こうなったら実力行使か？俺は思いきってハルヒを抱き寄せキスしようとして……思いつきりハルヒにひっぱたかれた。

「何するのよ、有希もみんなも居るのに。

あんたってやっぱり馬鹿？

この万年欲情色ぼけエロキョン!!!!」

「あら、ハルヒちゃん。照れなくてもいいのに。

お姉さんも楽しみよお」

キョン君、ここは押し倒してちゃっちゃんとやっちなさいよ」

「は、はははは。これは失礼しました、ちよつと森さんを見てまいります。

長門さんも」

古泉が満面の営業スマイルで長門の腕を取りほとんど引きずるようにして部屋を出て行く。

「あ、あんた達が出てったら私せつかく、もう、しかたないわね。

じゃ、ごゆつくりい」

舞さんも殆ど『バチリ』と音がしそうな程特大のウインクをして部屋から出て行った。

病屋の中、ハルヒと俺と二人つきり。俺はもう一度ハルヒを抱き寄せ耳元に囁く。

「ハルヒ、お前が好きだ」

それから何が有ったか？ そんなこと俺が知ったことが。なんぞと言うと要らぬ詮索をされるからハッキリ言っておこう。ハルヒにキスした直後、眠いと言言ってハルヒはストンと寝ちまいやがった。その後程なくハルヒのお袋さんがやってきてくれて差し入れの軽食を皆で摘んでいる頃、ハルヒがむっくりと起き上がり自分にも食べさせるとこねたあげく、卵焼きはやっぱりお母さんのよねなんぞと言いながら病み上がりとは思えない勢いでおにぎり、唐揚げ、卵焼きにぱくついていた。かなたのナノマシンが間に合ったのか、橋と藤原の事はどうやら覚えて居ない……とは思っただが。

その後、俺と古泉は例のタクシーで帰宅し長門と森さんが病室に着いてくれることになった。

帰りのタクシーの中で古泉に聞いたところでは森さんが藤原を追って廊下に出たときには既に藤原の姿は無く、長門も時間跳躍が行

わたれたのを観測したという。

「いや、流石、奇跡の一手でしたね。特大の閉鎖空間が発生しようかという瞬間、あなたのお陰で未然に防ぐことが出来たのですから」
「いや、あれだな……」

「あなたの事やナノマシンの事を古泉に話すわけにも行かない。くそ、忌々しい。」

「ああでもないといいつ爆発したら大変だろ？」

「さようですね、しかし橘さんとあれほど親しげにされているのを見ますと私どもとしましても少々心配ではあります。どうかお気を付け下さい。」

「ところで今回のあの未来人の現れた理由は何だと思われませんか？」

「訳分からんがハルヒに直接危害を加えようという訳ではなさそうだったんでちよと安心したんだが」

「そこなのですよ」

古泉は右手の人差し指で自分の額とトントンと叩きながら続けた。
「彼が涼宮さんの前で語った内容は二つ、涼宮さんのSOS団の活動を否定した事、そしてあなたが鍵だという事。だがそれで何がしたかったのか、新春早々とんでもない宿題というわけですね」

藤原が言った内容は本当にその二つだったのか？ 俺はその時からぼんやりとした不安を抱いていた。そして、その事があるいは朝比奈さんの卒業をめぐるハルヒの振る舞いに影響したのではないかとひそかに案じているのだが、その事はまたいずれ。

第六章 危機 第4節（後書き）

次話は「かなたへ 第十八部 ?? 冬物語拾遺」

<http://ncode.syosetu.com/n5397>

m /
です

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1989m/>

かなたへ 第十七部 雪の季節

2010年10月8日12時36分発行